







Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.311



四 月号目次

題

字……麻

生

路 郎

> 昭 和 =+ 八 年

川堺	鹏	短	評句	
雅大	艷態川	冊	領了	
一雑スピリット…	川柳	展	評硝子戸の中	基
リの	棍	展にて	0	
12	唱:	~	中	船
			1	
八	品	麻	没香	*
六木	Ш	.生	至.	= =
摩天郎…(三)	陣	路	没食子 白柳子…(*)	総米日三身之介
郎	居	Ø8	子	3
	居…(10)	郎…(三)		
=	(0)	恶	ざ	

社 輝く名句の殿堂 0) 黑 板………(三0) 土 井 交 蝶…(四)

各 一路集 同 111 地 舟 柳 近 「コップ酒」…… 壞 詠..... 塔..... 泊」……上田琴光選…(これ) …麻生路郎選…(八) 須崎豆秋選…(一个) 諸 ……(温) 家…(三)

斯く考えた

置

文 笑…(三)

二字詰の古句………

富士野

鞍馬…(三)

不朽洞会から………

-----(三)

同 私

忠美…(吾)

句柳

0

友……大森風来子…(意)

柳

界

展望.....(三0)

に対する私見(一)……戸川柳と俳句の区別……戸

田

古方…(二三)

近

作

柳

樽………麻生路郎選…(1四)



時—四月四日(土)午後六時

題「かけ出し」・「秘密」・「同件」 處一大阪市天王寺区下寺町二丁目 (市電下寺町・日本橋三電停前下車) 評話 水谷鮎美・戸田古方 麻 生 路 郎 於 光明寺

来会歓迎·鉛筆持参 川柳雜誌社 句 会 部

展

郎 麻 生

知れたものだ。 限り短冊一葉の値段は 童的価値のものでない 幾ら高いと云つても骨

ら 理由だけではない。

合が多い。句は大変結 て、ふさわしくない場 云う理由は床懸けとし 好きだが買わないと がち値が高いからと云 ある。好きだが、買わ ないと云う短冊はあな が、そうでない場合も 場合、すかれることと、 るかと云うこともハッ が出ていたことは云う 中で又それんへの個性 がよく出ていた。その は俳句、川柳は川柳 に解してもい」と思う 売れることとを同義語 キリと判つた。多くの と、それんの持ち味 詩は詩、歌は歌、俳句 強になった。画は画、 ろんな意味で、よい勉 どんな短冊がすかれ こんどの短冊展はい びしさがあるのが多い たるが、川柳の恋の句 なんとなくボンヤリあ らしい。歌人の詠む恋 はいささか気がひける の句の短冊を懸けるの まれた。吉井勇や川田 わけにも行くまいから どもがあるので、まさ 構だが、学校行きの子 からであろう。 は、冬の夜のようなき の歌は春の夜のように ない人でも、川柳の恋 ることを、左程気にし 訓?になる句をのぞ 人たちは多少とも数 と云うような言葉を耳 順の窓欧の短冊を懸け にさせられた。そんな か恋の句を懸けておく に懸けたいのである。

までもない。

は持つて帰ったら直ぐ あるが、大多数の人達 つかわ懸けられるので なら買つておけば、い もあつたようだ。好き から買わないと云う人 帰つて直ぐ懸けられぬ 外ずれなので、持つて 好きな句だが、季節

まい。

れなくてもい」のであ あるから、売れるにこ したことはないが、売 賞してもらうのが主で 要するに短冊展は鑑

その句にふさわしい文 少々月並でもいく、 **う意見の人と、句が気** 字で書かれていなけれ にふさわしい名句が、 と云う人もあつたが、 で書かれてあればい」 い短冊に、好もしい字 ない人もあつた。句は は下手でも一向頓着し に入りさえすれば文字 では懸けられないと云 巧くても、文字が下手 いゝ短冊に、その短冊 それから、幾ら句が

出ていれば申分はある その人の風格がにじみ かしい註文だが、そこ もいた。なかくむつ はないだろう。そして まで行かねばホントで ば全然ダメだと云う人

ないような作品が、堂 間の多くの人達には何 ないような大作や、世 ことはない。その点洋 よいと云うて云えない 敷に懸けておけないよ る。従つて季節外づれ はないのである。 云い方も云えないこと 堂と展覧されているの が描いてあるのか判ら 画展などで、置き場の んなことは、どうでも うな句であろうが、そ の句であろうが、お座 と何等変らないと云う

た。 について考えさせられ 体としての立場の相違 では個人的な立場と団 うに、全然作品が売れ 分の思うが儘の演技を るだけである。その点 では主催者側を困らせ ないので與業主がにが ばかりでは、俳優が自 い顔をするのと同じよ なくてもい」と云うの して観客がサッパリ来 然し、そうした作品





燦として輝く

4

土 井 文 蝶

たち川柳不朽洞会員の恩

柳界の巨匠であり、私

文化方面への活動は全く ら既に五十年の歳月が流 師である麻生路郎先生が みの余りにも遅々たるを あると共に、柳界の恩人 得ない。 は等しく頭を下げざるを 足跡を憶う時、私達後人 い現狀で、その超人的な 停止するところを知らな 刊行ど、柳人育成による れたが、今なおかくしや 川柳に手を染められてか を上昇せしめ、柳界の視 奔西走、遂に文学的價值 柳の社会化を提唱してこ 態嘆し、川柳の革新、 詩型に比して、その步 が新興して以來、他の短 である。明治末葉に川柳 くどして「川柳雜誌」の れが実現を期するため東 先生は私たちの恩師で III

野を拡大されたその功績

られ、

入口のどころには会期

中に一般から募集する投句函

先生の川柳生活五十年祝賀記 なきことではない。 念事業を企画したのも全く故 して、全國柳人に呼びかけ、 たち川柳不朽洞会が率先主催 外にまで多数の会員を持つ私 の故を以て、全國並びに海 ないところのものである。こ は何人を雖も認容せざるを得

贈呈の式典を挙げたが、今回 名吟佳什さその名筆を鑑賞し 先生の壽像をつくり、之れが となつたのである。エレヴェ 日まで短冊展を開催すること リーにトし三月三日から十五 は更に第二企画をして先生の くには多数の川柳行燈が掲げ ベノ近鉄百貨店七階のギャラ ていただくために、会場をア その第一企画としては曩に ターで七階へ昇ると会場近

筆までが吊るされていて一般 定が記るされ、投句用箋や鉛 健康を害しつゝも鋭意、百六 短時日ではあつたが、先生は も企画して僅に二旬足らすの の興趣を喚んだ。それにして が設けられ、投句の課題や規 に墨痕淋漓たる掛軸二点 (おれに似よ俺に似るなど子 十葉に及ぶ短冊の揮毫と、 は仁義礼智信 をおもひ。ふるくども僕に 更

瀟洒たる掛額三点 (その日暮らしも軒に雀がこ 葱との仲であれ・うそをま ぼるこよ・いつまでも肉を ろめて書齋けうとし)

で一般の展覽に供した。 済の札を貼つて会期の終るま たが、掛軸、 ある。短冊はすべて即賣され があつたが、掛軸、 短冊元より妙味津々たるもの れたことは驚嘆に値いする。 ます~一円熟した雄筆を揮わ 盌三個·菓子セット·番茶器 余技をしての陶器の揮毫(茶 ならびに、足を京都に運んで つて、その前にしばし佇立し つては垂涎措かざるものがあ て何人も動かなかつたほどで 揃・銘々皿一揃)に老いて 掛額などは賣約 掛額に至

たこどにも先生の人格の高潔

出

品作品に至つては師の名を

次に私たち不

朽

洞

会員

0

つて錦上花を副えていただい

さがしのばれたが、

同時に諸

羞かしめるものであるが、枯

俳人· 界名流

柳人)

(画家・詩人・歌人・ の協賛出品によ

句の短冊展は全く成功そのも

も螢光燈下に燦として輝く名

である。堂々たる会場、 を見て涙ぐましくなつたもの

しか

のであった。

かてゝ加えて各

5, 先生は「こんなにもうまいの それ位でいゝでしよう」と かなア」さたんそくしている 云われる先生の作品であるか ないので、奥さんから「もう 毫を好まれないし、仮令揮毫 れた盛况振りだつた。常に揮 会員すらあつた。 しても一字をゆるがせにされ 日目に全部賣約済の札が貼ら 拙づかろう筈はないが、

て万割する。

陸続と足を運んで下さつたの 大成功だと思つているので、 大方諸氏が非常によろこんで の仕事を押しつけただけでも ては、多忙な先生にこれだけ たが、私たち不朽洞会員とし 満足されていないようであつ しかし先生は、その多くに

1

小人なを

そし かっとん

國に及んだことは特筆大書し 賛は短時日にもかゝわらず全 拂うものである。柳人の御協 記念事業を御俠援下さつたこ 先生方が惜しみなく私たちの そに感激し且つ深甚な敬意を

余技揮毫作品に至つては二

びは、 ることが出來ないであろう。 展覽の光栄に浴し得たよろこ 遇のこの好機に席末を汚して しを願いたい。しかし千載 木も山の賑いとしてお見通が 私たちは真によい勉強をさ いつのいつまでも忘れ

い。終りに 御礼申上た あつくし 諸先生方に 先生はじめ いたことを

職責を果さ 長さしての の事業委員 く本短冊展 けて大過な 力な私を接 諸氏が、 並びに会員 々施理事 会の中島生 川柳不朽洞 柳川 ·大谷五花村·堀口塊人 柳不朽洞会員出品者名

協賛出品者の御芳名

入賞三句は

順不同·助稱略 其他の入選句は次号の「各地柳新調の服で持逃げ逮捕され 就職の脊広も出来た明日へ寝る 新調の脊広カメラが欲しい肩地 大阪市 奥仲 麦中 左の通り、五日に会場内に発表、

冬衛·藤村雅光·藤沢桓夫·入江風·安田章生·小野十三郎·安西 柴谷宰二郎·今中楓溪·安田青矢野橋村·生田花朝·山口艸平·

壇」に発表することにした。

守口市

藤富

の度私達が恩師の

していただ

裡・戸倉普天・福田山雨楼・高鷲中島生々庵・武部香林・村松夢 種瓜平·八木摩天郎

屋上の埃りも春といふ軽さ 大阪 正本 は左の通り、 切り八日会場内に発表、 「屋上」は三月七日午後三時に締 短冊展会場で第一週に募集した 屋上 入賞三句 郎

屋上でラムネー本だけの客 屋上で見れば煙も美しく 次いで第二週に募集した「新 大阪 出川 風路

大阪 木下

水客

調」は十四日午後三時に締切り十

として、ホントにいム催したいたことを有難く思つて居ります。抽 筆の上だいたことを有難く思つて居ります。今後一切意に翻いたいと思っていたとります。今後一切意に翻いたいと思っていたといる性にあります。

御礼の言葉に代えます。 居りますことを申述べて 麻 生 路 郎

するの 心から感謝

して下さつ たことを衷

選

(写真説明「ー」は会場風景 「』」は路郎作品の一部

> を開催いたしましたところ大方の諸賢がお運び下さつたことを心から有難 だ百貨店の方々、この事 に協力して下さつた諸先生 が、種々御配慮を煩わし た百貨店の方々、この事 がお運び下 さつた会 昭和廿八年三月十六日 ため記念事業「短冊展」 柳生活五十年を祝賀する 理事長 短冊展はお蔭を持ちま 川柳不朽洞会 中島生

(顧不同·歐爾略)

一々庵



身勝手ないつか冷たい人で

事情も出來てこようし、若いかつて來ると云うのが世間のかつて來ると云うのが世間のないか、色々とないかもしれないが、色々と 愛がつてくれるが、倦怠期を ないど夜も日も明けぬ位の 漫食子=男を云うものはどう 頃のように行かない場合もあ 一線にぼつくく熱がさめ出す ことを云つて喜ばせたり、 する迄とか新婚時代はお前で も氣隨氣儘な者である。結婚 層ひどいのもある。「こん 人によるとその度合が

ました。 く味があると思うので提出し あるが、「いつか」に何とな

と云つたように感じてい じる処は夫婦でなく愛人同志 白柳子=私がこの句から感 ŧ

の夫婦の のと違いますか、こう云う様 性の方は身勝手なまねはせん の年月を経た間柄でないと男 漫食子=愛人同志とした場合 に考えたので、私は倦怠期後 かなりの深い間柄で且又長期 問題さして受取りま

ど考えます。「身勝手」で男 白柳子=そうすると、この 香林=私は結婚生活の倦怠期 う当るような氣がします。 冷たい」で云う言葉がきつ

> であつて、中七の「六十一」 れで句の構成上繰りがいるの ちいじみ」がいっと思う。こ

には同感だ。今は満年令だが

感じます。

つている処に此の句のよさを

間には彼等の生活水準以下

者が沢山存在している事を

の声は、もつどもであるが

だ。最低生活確保を叫ぶスト

」と「手持ぶさた」を区切

る。一女ようを泣いている間

句であると思う。僕もこの句 にかつちり当てはまる云い語

句でしては單調すぎる嫌いは を落胆させる事が往々ある。 な人でもなかつたのに」と妻

> らする家庭生活の破綻に警告 なりますね。 が詠嘆している句と云う事に 没食子=要するに此の句は妻 場合が多いのではないか。 対して冷たく当るようになる された場合に、何時しか妻に を発している。男が外で誘惑 想像出來る。要は男の我儘か の我儘なそして複雑なものを

三面の六十一はちょいじみ

三月号川柳塔より

す。この作者が六十一の人の 馳け離れた事を感じるもので 持つているが、新聞記事なん 令をはつきり窺う事が出來て る氣持がよく出ている。たど るのかご云う驚きを感じてい かに出てくる自分と同い年位 は何時も若いと云つた氣持を いゝ句だと思いました。自分 分自身が六十一にもなってい 何かを新聞で読んだとき、自 白柳子=この句から作者の年 ちゝいじみ」を云う下五が 人の事を読むさそこに何か 寸氣になりますが………… | 食子 | 僕はこの下五の「ぢ

自己記録川柳ではないか。 多い。この句は矢張り一つ 差であるが、去年の年がした 職前、正月が來て一つ年を取 わしい様な気持になった事が つた場合、何だか年は一つの

を强めている。 自分の年令を振り返り淋しみ 犯した様な記事を読んで今更 二つも重つているので、句意 五の「ぢゝいじみ」は濁音が みがよく出てゐるを思う。下 を感じたりするが、その淋し 林=私も三面の何か罪を

二月号川柳塔より 女よ」とないている間の手

句ですね。 いる。水客さんに似合わない の困つている狀態がよく出て だ。それを持て余している男 劇の内容を想像さすに充分 泣く」がよく利いて複雑な悲 み下せる何である。「よゝと の句であるが、すらりと読 持無沙汰 林=この句は六七六の破 (水 答)

ストのデモぢつと見てゐる (十 占)

う表現が此の句を生かして 没食子=いや、あの人はこん 白柳子=「手持ぶさた」と云 夏秋冬、種々なスト攻勢が出 なんか昨年末あたり却つて乗 恒例とでも云いたい様な近年 なつて來ました。矢張りアプ **②食子=戦後ストも華々しく** 客の反感を買つた方が多い ますが、年末なんかのストは です。然し交通関係のスト レの申分の一つでしよう。春

な句を作るのや

0 け泣かしておけば女の氣が済 いゝのに(笑声)然し泣くだ いるまになだめてゞもやれば 浸食子=此の男は一寸薄情者 うぶなんだ。 白柳子=此の男は純情なんだ むと云う手もありますがね。 ですよ。手持ぶさたになって

も分りませんね 没食子―それどもうぶな男か

浸食子=この郷め方はやつ 手持ぶさた」こうした馳け離 をうまく纏めている。 の中で女の氣持を男の狀態を れた言葉を巧みに用いている 香 林=「よゝを泣く」を 処がうまいど思う。一つの句 ば

二月号川柳塔より

りうまいですねっ

でもよくなれかしと作者は

ているのであろう。

にこの句の淋しさがよく出て が出來たらと思う事だろう あのストの中にでも入ること いると思う。 「ぢつと見ている」と云う処 人達であつたとしたらせめて てストをやった時代が懐しい 0 か な事業方面の不况から失業者 るべきである。近年の 一寸行き過ぎの様な傾向であ な不遇の人達の目にはせめ 出ているが、優勝劣敗は世 習わしとは云いながら此 思えぬふしもない。 そんな経験のない スト

ど見ている」の中七が弱いこ

白柳子=それにする。と「ちつ

があまりに多くある事を知らせかつているつもりであるが 省を求めているものと思う。 である。句主はこうした社会 が寒心に堪えないど思う。ス してない失業者が、ストのデ ねばならぬ。労働組合に加入 ト側から云えば民衆の利益を 様な人が指導していると聞く トをせねば飯の喰えぬど云う が爲めの戦いであるが、又民 矛盾を突いて労働者達に反 を見ているのは大きな悲劇 の敵であるとも云える。ス 林=ストは民衆の生きん した社会の矛盾が少し

ある様に思う。 もご云えぬ味わい深いものが つと見ている」と云う処に何 没食子=この句ですね。 「ち

よい。 此の場合强い表現でない方が ている処がいゝのでしよう。 没食子=ぢつと感慨にふけ ないかと云う処ですね。 あるから「ぢつざ」でよい。 没食子=失業者の とないかと思う。 林=もう少し弱い表現は 淋しい句 0

て强く云い切つてしまうより 氣持がはつきり浮び上つて來 れば句は單純になる。 るのだと思ふ。强い表現にす も返つて、逆効果を出してい 弱い表現だからこそ失業者の 張り淋しい氣持を現したい。 沒食子= にしては 白柳子=「デモ」に抗議する 林=同感ですね。 抗議はしているが矢 「ちつさ」が弱い。

50

三月号川柳塔より 百万税金よけの神もがな

んでこれは國民全部つまり いで「ハッピャクマン」と読 時は「ヤオョロズ」と読まな 白柳子二 最初この句を読んだ

る。処でこの句、

今白柳子さ

んが云われたように僕も「八

世の中は皮肉である。

たとしたら恵美須様そこの 建つかも知れないが若し建つ

H

矢張り「萬」でないと何だか 字が略字であったのでそう感 ました。それはこの万と云う 「ヨロゾ」と読みにくいよう じたいのです。こんな場合は 「八千万」の誤植かなど思い と同感であ 百万」は國民を代表する数

がな」と下五に結んであるの も此の何を生かしていると思 ばと云う現在の社会を諷刺し こで税金よけの神様でもあれ 子もなくなつ 金に取られてしまつては元も のではないか、商賣繁昌さ た句だと思います。一神も さして頂いても、すつかり税 金よけの神様があつてもよい に思う。天律神、國律神、八 して下さる神様があって儲け 萬の神々の中に一柱位は てしまう。 2 稅 嫁き 0

除けの神様、今にそんなのが しい様に思う事もある。税金 り出されて取られる。あほら ても税金がつきまごう。体給 浸食子=今の世の中は右を向 からは取られるし、その取ら いても、左を向いても、喋つ た税金から更に市民税を割

な用語である事は白柳子さん は詠嘆調であつて此の際適切 初思つた。下五「神もがな」 ち「八千万」の誤りかども最

のが多い。 せてよい句だと思う。花村君 り、下五にユーモアを感じさ 読んだ句には穿ちの利いたも れている。 金問題がやかましく取上げら い。例を上げると 句でしては他にも名吟が多 林二近來川 それだけに税金を 此の句は穿ちもあ 柳 の上に税

ごめんねと云つて仲夏し先に 天と地の間をヒョコ馳け廻り

である。 など、非常に視野の廣い作者

三月号川 好機逸せず香奠持つて行き

の人出となる事は受合いであ 取つては好機なのであるから て代議士に出ようとする人に みがある。 生命は上七にあつて多くの含 事がうかざわれる。此の句の う。香奠を選挙に結びつけた サラリーマンの不幸がやが 林二これは時事川柳と思 終もゆかりもない 法泉子) 思う。 く」とした方が確かによい お説の通り「香奠を持つて行

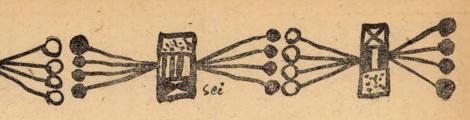
郎 う。大胆な詠み方が此の句 重みをつけている。 短命を事ごする時事吟も此 レベル迄來れば成功と云えよ

思いますが……。 方から見て句意を强めたい て詠んだかも知れません。 を持つて行く」を句意を强め の敍法に就いては「香奠持 白柳子=香林さんの御説明 て行き」を私だつたら「香奠 句意がはつきりしました。 好機逸せず」と云う句の H 句

うか、それに利用せんとする 持つて行き」は白柳子さんの 氣持がよく出ている。「香奠 己の慾望と云うか、野望と云 の氣持、 没食子=「好機逸せず」はう あり、悲しい他家の狀態を自 就ど云うか、 節到來と云うか日頃の願望成 まい表現ですな。先程香林さ れは選挙に限らずい商人なん んが時事吟だと云われたが かにでもある事だと思う。 本來ならば 此の時どばかり 嚴 粛 で

香 林=同感ですね。

(春巣 筆記)





中 島 生 × 庵

大阪市

もう一言母親新婦に追いすがり 新調がシックに過ぎて風邪を引き 控室借着借着の肩の線

無抵抗という抵抗も性格か 山の木を賣つてライカを買うという 池田市

戶

田

古

方

よい話自動車をよけ馬車をよけ 尼崎市 水 谷 鮎 美

單線の駅でいつもの女優乗る 指命犯人とは知らなんだ優さ男 差押へ養豚場の春がすみ

大阪市 市 場 沒 食 子

学習の子の次の間の晩酌よ 方便の嘘も上手に人氣者 パチンコへ寄る風呂行きは金を持ち 倉

上座の茶菓子もつども減らぬなり パチンコで酔をさましてから帰り

山一つ賣つてドル貨を持たせたり 引揚げはすぐ舞鶴を春にする 血痰と沈思とねだこつづくのみ 横浜市 田

Щ

雨

楼

春團治逝く大阪は漫才か

男嫌ひ落籍せば只の女なり 流行歌彈いて名取りは寂しがり 肩身廣う余生送らん帰化講座 金になりや愛され様がされまいが 字も書けぬくせに端唄のうまいこと 好きとなりやくさみの顔も氣にならず 男手に磨き水乳のように見え

掛放しのラジオも若い人の部屋 主観的な幸福に居る手内職 行つてらつしやいと云ふ子も居な社 電休ですのとサボッタのも混り 東京都 田 に出かけ

集合の足の早さも十二月 大牟田市 高 田 抱 逸

度ころべば機雷思わす救命具 ビルの夜辺

北海道の旅青函連絡船

御用聞一々雪の戸をたゝき 流の川の夜道みんなが熊に見え 生活を雪にパン~~斗ふて 燻製の蛙がミイラに似て並び

遊ばせてもらえぬ不足藤間流 春の陽え万年青をづらりならべとき お茶漬でいゝから母はいにたがり ホノル、市 砂

鴨

美

笑

普

天

世の中を美しく見で騙される フリゲート威風堂々とは書かず 結局は働く方が勝となり 今日からは市民ミスタートルーマン

田

水

車

旋

風

郎 いつ見ても留守かと思ふ大構え 阿呆の一つ覚え政府のたからくじ 居眠れずわずか十万円ほど持つて 大がらんさりとて泊めてくれもせず 大阪市 須

秋

ホノル、市

豊橋は二十四時過ぎいなりずし 失礼々々君もプライド持つてたか 東海道富士を忘れた旅つらく こんなのが代議士かなど顔を見る この村の豊かな朝へ鬼瓦 大阪市 Æ 本 水 豆

答

神詣り雪があちこち残つて居 お休みなさいというて女中の顔になり 抱き止める誰か來そうな溪の景 けいこ屋の猫次々に膝を替へ ふつつかな嫁が一家をささえ切り 一應は嫁ぐときめて白衣脱ぐ 尾 潮 春

花

パンしてはあわれな靴をはき 新家庭何を聞いても貰い物 女房の智恵古道具屋で探し 義理二つ果し日曜疲れ切り 大阪市 北 M

巢

それほどでご座いませんと美人云ひ 血圧へ禁酒は一寸想ふだけ 奈良県 崎 方

TE.

あだ花が散つたと思へ世継ぎなし 停年の晝寢が犬に似ていたり 重役になり人間になり損こね 弁護士事務所冷たい会話ばかりにて 料理放送鯛をつかえと値も云わず 部



細大洩らさず女には知らせ

森 風 來 子

保險屋がどう~ケ炬燵~上り込み 銀ぶらに出掛けるように出発し ストーブは眞赤ビールを所望する 満年御夫妻を岡山駅にて送る

孫出來てからは二号に遠ざかり 湯の宿にて 大阪市

竹

莊

丹前の女をつれて土産店

下関市

國 弘

4

休

[19]

事前運動はつきり年賀はがき來る 立ち止まるどこが絵になる安藝の國 郊外の春霜やけがかゆいだけ 博打場の寺錢かせぐような税 ガモーへと言つて仕舞えばもう正午

世を挙げて男卑女尊に傾けり そこはなんとかごまかす氣の女連れる 一級三級燒酎どぶと落ちて行く 京都市

父老ひけるかたべると寝 蔭口も蔭の仕事も京氣質 角帽が來た娘を守れそら守れ Щ

遺見抱いて强い決意がくぢけかけ 碧い目の子に春の風ランドセル と月も寝れば干上る医者の弁 たわつてやれぬ氣持の嫁をとり 吹田市 本

吞

水

内閣が変ればなどと働く身 女房をだました同士逢ふ穴場 大阪市

> 妻或る日僕に責ある風邪をひき 蔵の差も言はずアプレは恋をして

デモッたと知らずほころび母は経

路傍の石と成る運命に生れけり

清姫の恋となるのをもてあまし 節分のさわぎもよそに一人ねる 奈良県 飯

降

白

香

冬の街角夕刊の子の迷いそう 手をかざせば女なまめく風情

姑は炬燵にい ても鼻がきゝ 野 蛙

夢にだけ孤兄は微笑むことを知り 長襦袢脱げば美術としての價値

駅長の帽子が欲しい子に泣かれ 朝からの雪目出度がり 京都府 間 嶋 青 丹

由

古日へ

子のために神は生きよど言ふて吳れ 1: 田

財産で及ばぬ時は家柄で 蟻の街下手な詩人が一人は居 俺の面よく見て置けどひきがえる 自家用車許り恐妻会じやそな 岡山県 山

打てば響く女房を持つて世に出です

直

原

七

面 Ш 林 文 月

大阪市 岡

淡

舟

未亡人離れを貸して若返り ビロードの艶に乙女の夢は似 言訳の智惠を彼女に授けられ 青空へ二人の欠伸まで揃

男の眼にチンドン屋笑われ

す

宇部市

林

粗

影

自問自答男心を知るは壁

対一になれば女無心云い

腕力で勝てそうもない捨台詞

悪口でやつと話のけりがつき

子 風邪引いた友の名並べ子の日記 人形ではないから舞妓嘘も吐 画像の眼光だけは凄く描き

独立々々又も死ねごや云うならん 沿線だより他処の櫻は知りません

想い出へがらつと変つている宿屋 ボローへの障子がいつそ寒うする 浜村温泉にて(二句 鳥取市 日

またきてねミチップ貰つた声出して 皮手袋お前等がする柄かいや やぶにらみあれでも藝者はんかいな 水仕事妻にも凍てし日のあらん

马

削

平

春の雪びつくりさせてすぐに消え 拔かれるも拔くも男の厄前後 兵庫県

花

接客の際に支社長脊伸びをし 男代々減らさぬだけがやつとこさ 本

首を吊つた男それはパチンコ屋でした 花

大阪市

満

夜の道義足の音も淋しいね

年寄りの尺度に合わぬ性なり

花

П

秋

蝶 恋もなく娘聖書を読みつざけ

文

黄昏を何処迄歩く独り者 一号邸の方へは電氣冷藏庫

藝者にはあらねどお座敷かっるなり

満

年



ビル街を歩けば貧しき人に見え 社用族も悪くないもの自家用車 伸びしくと家は岡山井ですみ きようもまた営業用の媚に遭い 熊本県 П

押し賣りへ炬燵の声の素氣なく 孤独感知るや鉄びんだけたぎり

岡山県 福 島 鉄

兒

こんど逢ふ時は重役室ならん 七百粁心の紐で結んどき 鶴見橋からなつかしい家が見え たゞ歩く丈けの岡山とはなりぬ 藤本満年氏を送りて (四句)

もう逢えぬ様な挨拶してしまい まだ見込みあるのか高利貸すと言ふ 岡山駅にて 東京都

嫌いごも知らずに猫は馴れくし 東京の三日目まんまご詐欺にあい 杯のお茶へくつろぐ夫なり

カムバックの可否一瞬のレント 一貫先ずうどん屋へ入つてい ゲン

大阪市

を

未亡人主人を聞かれハツとなり お世辞には敗けない文けの自信 十年も会はずに居つて金を貸せ 服 もち 部 + 九

商談が不調パン~一痰を吐き 湯水さへ湯水の様には使はれず 替玉が科白の様に自供する

尼崎市 長 谷 111 Ξ 司

炬燵から見れば落葉もたのしめる 鯛茶など子が贅沢にものを言ふ

見舞客たゞ見るだけの病なり 若 林

草

右

足音の乱れ患者は死んだらし 脈とる手冷し外は寒いらし

如

Щ

北風に逆つて行く孤独感 自然治療靜かに教ふ老博士

西式も今度の風邪はひいちまい パフ叩く間に嘘を考える パンしの髪相鋭い陽がのぞき ストリップ教え子がいた教え子が

仮病かど云われた風邪のお元日 ダム工事飲食店から建ち始め

茶

勘定は頃で支拂う社用族 恐妻宗養子ですよど軽く逃げ 下関市 坂

路

嫁の鼻低うて家は平和なり 誘惑をなんとなく待つ齢になり 税吏へはきざみたばこをすうて見せ

手土産の蠣で御馳走してもらひ 栄轉の任地にもあるパチンコ屋 かお乳房愚痴もうれしい母となり

平

娘の機嫌朝から笑い轉げてた 押賣りが素直に帰り靴さがす 大阪市

大阪市 足 立 春 雄

打入りの太鼓のほしい雪がふり 働

芳

仙

詰め腹を切る段階に來て焦り

岡山市 延

永 忠

親馬鹿の納得いかぬ通告簿

美

良 坊

田

誘惑に勝ち抜いた娘で質れ残り

季 猹

広島県

山

H

神様で一族あげる家を建て

猛吹雪國鉄自慢のダイヤ消し

大阪府

御本家の格で養子が座らされ

本 葉

光

課長さんストーブの世話に余念なし ストリップ見てから妻に馬鹿にされ 新聞が隅なく読める失職者 忘れられ忘れられつゝ日を送り 喜

久

叱られながら満足そうな恐妻家 風船屋割れた理痛も言うて賣り 大阪市 木 天

貧

此の度はまで聞き取れた悔み受け 連続の通夜一人減り二人減り 倉敷市 村 干 容

長生きがしたさに義理も少し缺き 岡山県 田 垣 方 大

虚をついたやうに二月の草が萌え

飲みに行く理由昔の紀元節 石川県 谷 光 郎

出戻りの味方に母文けなってくれ 就職の今日から日誌あらたまり たくまない仕草で女医は子をあやし 子程ちがふ漫才名コンビ

味

石川県

野

好きな娘へ否味も口に出る日なり ベースには遠くネオンの灯をそれる 大阪市

水

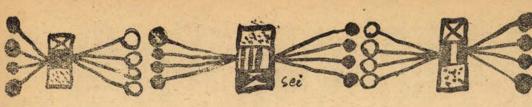
局長が好きだからする野球なり 所 新

岡

英 子

熊本市

花



子沢山猫はいゝ子のそばへゆき 混浴としらず女は先に入り 同権は淋しどこかで矛盾する

裁判所日頃の事も言ひつのり 一階借風の中なる子供たち 木 摩

天

郎

我が道を行かんと家出したものゝ お次の番だよと音痴からかわれ 犬つれて主人の行方見に出かけ 田

T

路

岡山県 谷

谷

水

世渡りはいやな話もせにやならず 妻哀れ若く見せたいしぐさする これが初恋の人逢うて寂しき 岡山県 原

娘のお酌何か無心があるらしい

機を見る事敏にして二号貯め 岡山県 田

村

波

読経今百匁蠟燭の大焰 人類に白黑黄のある不幸 逃避行もう朝鮮へは飛べず

寝過して足袋のこはぜもどめて居ず 預金部へ首の財布を外ずしたり 家出した後の納戸に時計鳴り

交際が過ぎて孕んだまゝもらい 赤族はもう振りません金が出來

政権をまだ放したくない顔の艶 溜息をついて見ているかぶりつき 岡山県 田

岡山県 田

潮

初午に株屋今年の運を賭け

岡山県 井 Ξ 薬

大 介 辛抱を上の子だけが强いられる

控目にしていてバスに乗り遅れ 妻あるを承知の本氣恐くなり

植木鉢もう停年を知つており の単へ父も矢張り手を出さず

ハイボール二百円とは知らなんだ 大阪市 柳

腰弁の頃なつかしい繁栄座 花よりも氣胸氣胸で春が過ぎ 岡山県 岡

4:

老夫婦和して夜店の灯を稼ぐ

豊中市

F.

10

す

3

ことわつてからこのかたの風当り 何党の運動員もやつてこず カッチンと音のしそうな養子が來

藝なしは遠慮しているように見え 写真屋は俺の顔だけ歪めどり へそくりの卵半値に値切られる

善

迂闊にも遠慮忘れた娘に育て 大阪市 稻 棐 鳩

花

買はすだけし、ハイさようなら 捨てられる覚悟の恋ではあつたけど 茨木市 F

清

潮

金持の猫の暮しもあなどれず

爆音に未だおびへ立つ土地に住み 酒好きの父に似合わぬ子で育ち 人里をはなれて春の子をおろし 合オーバちやんと子が着て出むかへる 本 田 惠

アーリランの歌声晴れぬ日が続き

瓢

正席へ明治元年先づ座り

憐れにも猫も妬く身と妬かれる身 どりあえず酒の値下げはほめておき

日 井 林 坊

なるようになれどは淋しい月給日 きさらぎもやよひも働かねば食えず こんにやくを煮つめおでん屋山にする 又鰯子供はト、が嫌になり

扇 子 個 行く末は眞暗ですど旅役者 ふと箸を置くモンテンルパの声

大阪市

田

六

竜

子

杜

的

母危篤映画の如く汽車走れ 接收解除ペンキの色が派手に過ぎ 村長も同じ頭布の雪の村

本堂は子に触りたいものばかり 大陸を知らず座談の外に居り パチンコで会えば債権者も笑い 鳥取市

就職難落第したい氣も起り 停年が來るのに一人また生れ 忙しいはづの仕事で酔って來る

好きと言ふ言葉冗談でも嬉し 身に覚えあるから恋の邪魔をせず 鳥取県 H 置 文

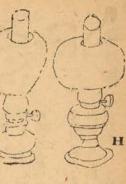
笑

愛人のくれた花なら枯れるまで 人間の力を見せたダム工事

朗

滑る氣で妻もズボンをはいて出 理想的な嫁です色の黑さまで 多忙とは知りつゝ無理も言える仲 大阪市 大阪市 佐 丸 野 Ш 牛

平



関 する私

栗林農夫著「俳句と生活」を讀んで

先生が新川柳講座の三十三頁以下 りましようが、それが作句上役立 たところでそれは一つの知識であ るとか、違つているとか云つてみ 負かすことの出来なかつたのもこ 他人からきかれながら相手をいる るのです。又これまでからもよく でそれについてあえて一文を草す 問題」がいちばん身にこたえたの た。ことに「川柳と俳句の区別の 色々自分の不勉強に気づきまし 人学校の川柳講座を受持つてみて が、昨秋大阪市教育委員会主催成 ことを書くのは蛇足とは思います おられるので、今さら私がこんな 十頁にわたり懇切丁寧に解説して ん。」という書き出しで麻生路郎 つというほどのものではありませ 「俳句と川柳とどんな点が似てい

者は同唐の奥書によると荻原井泉 ま手に入れたのが栗林氏の「俳句 水門下の俳人で雑誌「改造」の記 と生活」(岩波新書)でした。著 私がこんな気持でいる時たまた

> 学の確立、伝統文学の位置とあり の筆になる「あとがき」には民族文 いたと述べておられます。 誰にもわかる手ごろな俳句史をか 方、伝統の探求等の言葉を通して 者もしていたベンの人です。著者

けをする手がかりを得たように思 ら、さしはさむべき所には私見を 区別を考え、尙川柳の本質を確め 述べてみたいと思います。 ても考えてみたくなりました。 さらに出来れば川柳の将来につい いました。そこから俳句と川柳の 以下同氏の俳句史を紹介しなが 私は同書を読んで川柳の位置づ

二、明治以前(上)芭蕉まで

があります。二つに分れたのは支 情」とか「幽玄」とかいうのは有 ます。「もの」あわれ」とか「余 され、遊戲化さへされて和歌は支 た結果でありまして、万葉時代に 配と被支配の二つの階級にわかれ 配階級の独占物のようになって来 ん。古今集の頃になると、観念化 はまだその区別は認められませ 日本文学の伝統には二つの流れ

民衆生活の現実とはかくわりのな 閉的な宮廷貴族生活の反映であり ます。これは生活におわれている い一つの流れでありました。

遇されながら寄生していました。 継歌、戯歌、唱和問答体というの 筆文の中に がそれです。十訓抄という古い随

里まもる犬の吠ゆるにおどろき 花を見すってかへるさるまろ

であります。 おかしみは構成されています。 そうです。猿と犬とか、去ると去 女にたわむれる法師、あとはたわ して、その流れをくんだのが俳諧 を基として出来ているのでありま ぬなどの語呂合せもふくめてその むれられたその女のよんだものだ とあります。はじめの句は花見の ころいら連詠は全く庶民的趣味

方

万葉以来人民的な流がしかし冷

と仁徳天皇のことを茶化したもの

こういう「おかしみ」は型にはま かしみ」であります。 ば、滑稽諷刺、一口でいえば「お 俳諧とはざれごと、ふざけこと

> 卑下されつどけているのです。 はけ口であつたのであります。 であり、第二の伝統はみくびられ 第一の伝統に押され妥協され勝ち 歌である第二の伝統は風雅という 今日までのところ人民のこくろの に呼んでおきますが、残念ながら おしひしがれた人民のうつぶんの つた伝統にはみられないもので、 第一の伝統と第二の伝統と仮り 子のかいた「毛吹草」には「指す ころをもつていました。貞徳の弟 教養のためにむしろ守武に似たと 西山宗因ですが、貞徳は宗鑑をめ とあるに小櫛、盞、舟を附るは連 ざしながら保守的な性格と伝統的

ず山崎宗鑑、荒木田守武の名がで は室町時代の連歌からでした。先 て来ます。 俳諧がそれらしくなって来たの

編になる「犬筑波集」には 全く自由な生活をした人で、その 宗鑑は武士のなれのはてですが あまり煙の立つぞかなしき 高き屋にのぼりて見れば焼けに

番匠のかねのこどくに身は冷え 一寸二寸にかどむ冬の夜

しています。 から生れたものであることを意味 ろで連歌俳諧が第二の伝統即人民 る等は第一伝統には見られぬとこ 番匠即ち大工さんが歌に入つてく

そなへ風流にして、しかも一句正 だりに笑はせんはいかが、花実を 第一の伝統に迎合しています。 しくさておかしからんように」と る神官だつただけに「俳諧とてみ しかし荒木田守武の方は由緒あ

> 附也」といつて俳諧の民衆性をい にがにがしくもおかしかりけり 将棋、蜂、箱細工是等俳諧

わが親の死ぬるときにも屁をこ

子にてはあるまじ畜生にもおとり らばいかでおかしかるべきこれを 傾瑣な式目など作り全く第一の伝 おかし思う事の心あるものは人の ましめたもうぞかし……我おやな 云うに及ばず、仏道にも不幸はい 恥を与ふるは道にあらず、儒道は て「いかに俳諧なればとて父母に 統へ妥協しています。 す。貞徳はそんな人物だったので たるものなり」と憤慨していま という「犬筑波」の附句を批評し

脱にうたい出しています。 とり入れたり人間的内容を円転滑 談林を起した人で次の如く口語を それにくらべて西山宗因は後に 秋の季にまたいづこにか物おも

花の陰宿を貸さずば出ていなう 此里のみの月ではあるまい

君とならこの酒樽ものみほさん 寸さきは名も立たばこそ

後からぬ(千話)痴話のあまり

らかれ女なれどつよき心中

の文学形式としての存在価値をも らずしも現実の様相を直叙する必 ように短詩の限界を示していると らな超入的作句をしました。彼は す。一昼夜二三五〇〇句というよ 技とし、小説を余技としていま つているのです。 要はなく単純化と象徴性故に独特 も考えられるのですが、詩はかな が現われたのです。彼は俳諧を本 アリズムの道をひらいた井原西鶴 しかし小説で後世にしられている この間から近世文学に於けるリ

です。

の消費享楽と通ずるものがあるの 設でなく吉原や歌舞伎へ逃げるあ たともいえます。積極的な社会建 れは元禄という時代の影響であつ 極的に表現したにすぎません。こ

の偉大を害らというのではなく

俳諧は三尺の童にさせよ、初心の

明治以前(下)芭蕉とその

リズムの態度をうち立て写実主義

とかいつて創作方法に於けるリア 事は松に習へ、竹の事は竹に習へ 句こそたのもしけれ」とか「松の

じつたものといえるのです。 角発展しかけた第二伝統をふみに といえます。逆にいえば芭蕉は折 林は第一の伝統の破壊者であった ですが芭蕉を中心としてみれば談 俳諧を文学にまで押し上げたわけ 反逆児として生れました。そして でありますが、当時芭蕉は談林の その次に位置するのが松尾芭蕉

極的な興味でなく、現実から一歩 んが、新鮮な現実そのものへの積 をもつていないわけではありませ のです。芭蕉も人間的生活に関心 いえば一種の逃避文学だといえる いた情趣的なものであります。 きぬぎぬやあまりかほそくあで 芭蕉の文学は第二伝統の側から いそがしと師走の空に走り出で

> るのです。当時の庶民の反抗を消 は中世幽玄に通ずるものといえ 芭蕉のいら風雅のまことという ったのでした。 て芭蕉のリアリズムは失われて行 のになっていったのでした。そし 上を行くものは見出せず月並なも

茶の時代になるのですが、その前 に著者は一言川柳にふれておりま にしても平俗に脱して行きました といいますが、其角にしても支考 ります。支考は仲々の論客だつた なし吉野山」の句主各務支考であ 榎本其角と「歌書よりも軍書にか で知られている江戸児肌の豪宕な つ売れぬ日はなし江戸の春」の句 さらに幕末に近ずくと蕪村や一

のなかにあつたのです。起りは俳 でありました。前句附や笠附もそ の伝統即ち全く町人の世界のもの 川柳雑俳といわれるものは第二

U思ひ出しても 恥かしきもの 能様に乳人響いてよ今朝の文

アリズムを発展させたのでありま のです。談林のなかに芽生えたり に彼の新しさがあり、業績がある を主張したのでありました。そこ

奥の細道をはじめとする彼の旅

強さをあらはすものでありましょ のは彼への第一への伝統の影響の 景としてながめたにすぎなかつた 求し、それから抜け出ようと努力 でとらえるかわりに素朴な田園風 生活を見ながら、それを現実の姿 しました。彼はしかし悲惨な農民 とその作句を通して彼が自我を追 て中下の七五をつけます。 (空寝入)して追ひにくき顔の

蕉風であり、全体としては芭蕉の 来あとにつゞく俳諧の伝統はこの 現実からはなれておりました。爾 芭蕉はすでに直接に町人生活の

稽のうちに辛辣な諷刺をもつた庶

芭蕉のあとをついだのは

の方はさらに短く上五の題に対し て上の句五七五をつけます。笠附 これが前句づけで七七の題に対し 〇切りたくもあり切りたくもなし 盗人をとらへて見れば我子なり

(びつくりと) 入歯の落ちる評

が、「世態人情の機微をついて滑 前句附から川柳が生れたのです

骨になると差障りがありますので 以て社会と人生を傍観したのであ の町人の地位を物語つています。 でありまして、批判があまりに露 ります。この批判性は川柳の特長 的熱狂へは走らず、一定の距離を た。談林風のロマンチツクな積極 断じております。蕉風俳諧の弱さ 境が生んだものが川柳でありまし いらより町人達の趣味と教養と環 に満足することが出来なかつたと 民の詩である」と著者栗林氏も 連用止め」でぼやかしたのも当時 川柳はこの様にしてはつきりと

であります。 異常児位いにしか考えていないの 名をあげているにとどまり、その 達は「武玉川」「俳風柳多留」の のであります。しかし俳句側の人 血脈が今日に続いていることには 第二の伝統の存在を主張している 言及せず、まるで俳諧から生れた

ともいわれています。しかし俳諧の中単 我的宗教的であったといえましよ ら起つて「芭蕉にかえれ」の運動 を強調したといってもはるかに没 た。蕪村にくらべると芭蕉は自我 じ人間的自我をさらに強調しまし 上主義から芭蕉の持つていたと同 俗化の風潮のなかにあつて芸術至 与謝蕪村は芭蕉五十回忌前後か

秋梁き隣は何をする人ぞ 蕉

我を厭ら隣家寒夜に鍋を鳴らす

つているようでも現実のリアリテ 世的伝統の捕虜でありました。 のゝ中にあるようです。彼も亦中 イはむしろ下降して彼の棄てたも 彼の方法によつたので、理窟は通 之気上竹市俗之気下降矣」という かそうとしているのですが「書祭 二の伝統の庶民の中にある美も生 があるのでなく平凡な俗、即ち第 す。彼は美しそうなものにだけ美 てその中で美意識を説いておりま 無村は難俗論というものをかい

阪の大江丸でしたが の内で一番市井的であつたのは大 が出て来ました。三人の金持俳人 俳人と対照的に農民詩人小林一茶 伴大江丸、伊予の栗田樗堂の富豪 ころで江戸の夏目成美、大阪の大 いよいよ幕末も押しつまつたと

井人の心を得たものなのでしよう にしかすぎません。 が、それにしてもゆとりのある笑 と笑いの世界を吟じ、これこそ市 夕凉み地藏こかして逃げにけり 竹の子やあまりてなどか人の 諸国一見の僧にて候八十の春

げられた農民の生活と心理の反映 ありますが、結局は当時のしいた ストでありました。彼の複雑な性 れていますが根は現実的なエゴイ 世ばなれをした人間のように見ら 種でありまして、洒脱、飄逸な浮 格は全くその環境から来たもので 又一茶は俳人としては余程変り

郎 路

舞

15

は 息

す 子

ŧ 1:

ない様な太り方

は

膺で間に合ふレベルなり

同

同

肺

0

母

は夢をもち

貝塚市

友松

白道

點

為

ご 言われ一緒に風邪を引き

同

へそくりを数える指の暖くさかた

いことばかり女房の里 聞いて月賦がドキリする の夜が怖くなり てた君の片便り 15 知 n 広島県 黑本 芳泉

> 糸 掛 見 片

b

歯

B

カン

ぬ年まで手内職

IJ 切 物

7

様はたきにからる日曜日

愛知県

岩川

寬虚

あ

程

12

言

愛すると言ふより惚れて欲しいな

同

6

n を

T

3

夫婦も肩を寄せ

姫路市

難波

愁夢

いる丈けの男は脛を抱き

掛

L 帰

T

妻も

少

し酔ひ

轉 家

勤 H

8

T

都

会 Š

捨てられた種の一つが生きてゐる 前 課長ともなればやつばり太りたし パチンコ屋探せば会へる人であり 彼氏では 未亡人浮氣のスリルまだ捨てず 子を連れて出て逢曳をごまかす氣 母さんを寝かせた様に子が這ひ出 身 0 6 愁 ムまた旦那様まで変えちまい 人甘 をうたがふほどの化粧で出 0 な 理 意外ツルートテンのも 目 由 党ですど氣を許し 付 をそれどなく話 で女金拾 神戸市 大阪市 岡山県 松尾 池田 同 同 同 同 同 石川ひさみ 同 同 同 天信 古心

浮 後 聞 叱 前

世 添

絵

0 様に

女は蚊帳に入り り派手な鏡掛け

同 同 同

同

* T

矢

0

張

眞劍に日 ま

説けばガムをほつと吐 も歯入が來たでお引越し で亭主に持たす名古屋帯

バ

"

駅

長

室えずつど降り

恋を捨てゝゐた の本も積み重

兵庫県

森本

同 間 同 同

章 人

科

ちよいして株のスリルを女房とち

岡山市

津田麦太楼

俺だからよいがどやはり怒つてる 座布團を二枚つないで子をおろし

探

3

途

で車

券が散つてい

高大田市和

岩垣日本村

同

同

補

助

席

はステキであご支えてる

ちよつびりと良

人をほめる女客

憚 B くゞり岩くゞればそこも一人連れ らず 着 貴 ち 人 3 0 1-ま 0 6. 殿 す 詩 呼 壁 て左官は壁の割れを見 を言ひ 浮 車掌の腰のたくまし び 屏 情 氣 E 10 を 風 遠 2 出かける猫の で 度い程の勤直 かくす > る 6 地 下賣場 夜の 事 號 3 貝塚市 石川県 桑川 宮本 同 同 同 23 甲馬

吾が子丈け叱つて母はあきらめ

も う村議に出たい奢りやう

岡山県

岡田

青果

п

論 子

0

座

敷

え。銚子出しそびれ

特 女 友 金

急

で

10 屋 華 ヂ

< 避 燭

3 如E 5

は恋も高うつき

中 達

軍

用資金なんぞと他所でき飲む気

風に抗しがたかつたのであります。明治以 果にもよることと思われますが伝統をぬけ 的歴史的条件がまだそこまでいつていなか であつたのです。第二の伝統の選手と見ら ねに優位をしめていました。 前の俳諧は以上の如く中世貴族的伝統がつ ったといえ、さきの富豪俳人との交流の結 つたということと、その作句が生活的であ れていた一茶も只彼一人に終つたのは社会 っておりません。彼にして尚且つ平俗の

四、明治以後の俳句

たのではありますまいか ある言葉の遊びや所謂狂句的作句を排斥し ります。子規は「俳句は文学なり」との自営 ましたが全く月並の境を出ておりません。 発することになりました。子規までの明治 やがて正岡子規によって俳句と名打つて出 後は全く発句独立の姿をとるようになり、 単独作句が多くなつて来ましたが、明治以 というておりますが、 より出発しました。彼は連俳は文学でない の句はいろいろ新らしいこくろみがなされ 子規は「写生」と「理想」を対置して日 子規の活躍は明治二十四、五年よりであ 一蕉以後発句として俳諧連歌の形式より おそらく連俳の中に

れております。 す。その写生論は西洋画論に学んだとい 本文学の観念的な理想主義に挑戦したので

麦蒔や束ねあげたる桑の枝

た。「犬筑波」に番匠の指金をうたつたよう は今まで気づかなかつたことだといつて は保守的であり第一伝統の詩人でありまし す」ことにむけられていました。子規の態度 実には向けられないでもつばら「天然を写 います。子規のリアリズムの目は社会的現 こんな平凡な景、平凡な句を作ること

15			
中盤へ供託金が惜しく神整へ供託金が惜しくを念期洗へば他人らしくで意期洗へば他人らしくではいいた。	さかせぐだけを知ったた 段を昇れば多の音 人の今日は怒つて居 人でねるくせのま 人でねるくせのま 人でねるくせのま 人でねるくせのま	煮え切らぬ男をけつて秋ご居り を れほどでないお見舞の丁重な を れほどでないお見舞の丁重な 他達はストをストする術がほしや 他で ぬれば触らぬ神ご人も來す 美容院こゝも 亭主に職がなし 世話人が飲み厭きた頃鐘が出來	写真屋は屈んで伸びてハイ宜しま 札の文字が消えてる記念松就職もしないに髪をもう伸しま力があるうが人が多すぎる首吊りのひやかし加勢連れて行きる裁縫嫌い煙草の店番したしぬけにキツスをされて妻まりだしぬけにキツスをされて妻まり
引三なるり困なり	ただがして がして がして がして がして でを無口	なって秋さ居りなって秋さ居りなってのく	ない。 な記念松 をう伸し をう神し をうがぎる れて行き た番し で妻。を
赤穂市市市	岡山市 愛媛 川市	大 広島 石 一 川県	布 大阪市
同同川同同笠同西西井	同山同同村同同二本	医同同山同同山同田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	同滝同同同西同同純
去 勢	焦	全 柱 陽 文 角 ペ	香 . 風
瞬酌へラジオは小唄勝太郎 に月の街百姓の剃った顔 正月の街百姓の剃った顔 正月の街百姓の剃った顔 で月の街百姓の剃った顔	代をだんだん文際費へ削りてをだんだん文際費へ削りに椅子へ停年すぐに來る計の良心社長を困らせる計の良心社長を困らせる計の良心社長を困らせる計の良心社を不るがある。	酸をしたか手 氏もごんご来が 酸をしたか手 氏もごんご来が 酸をしたか手 氏もごんご来が した。 な娘が去ぬからほく。 をな娘が去ぬからほく。 をな娘が去ぬからほく。 をな娘が去ぬからなく。 をな娘が去ぬからなく。 をな娘が去ぬからなく。 をなりまると通勤車 で生きむこす くずをつけて逢鬼から戻り	代議士に大が吹えたでおかしがり でき 妻の 親 を養 ふ 縁 が有り さ 幸 南 和して税吏へ食ひ下がり テ 婦 相 和して税吏へ食ひ下がり ア オ 産 の 一 泊 分が未だ去なずはらたてゝトチリーへの 日 本 語 はらたてゝトチリーへの 日 本 語 はらたてゝトチリーへの 日 本 語 かんしがり ア カー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
金沢市県中市	大阪市市	到 具 倉 敷市 市	大阪山山 愛媛 東市
篠原古 電岡 青柳 高岡 青柳	同 坂 同 同 岩 同 同 第 页 五	新 坂 田	同石同同松同同島 田 村 井
職 青 茶 椒 花	千代美子	素 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	末
とま子の象徴は他の	覚 季た第え松 的従馬空題。ニよと	虚い植た東 健にを 産・ 産・ 産・ 産・ 産・ 産・ 産・ 産・ 産・ 産・	な作品 きりま きりま を新年以外の を新年の

な作品はのぞむべくもありませんでした。彼の次のことばはざらに彼の態度をはつきりさせます。

を許さず。」

子規のあとに出たのが写実的感覚的な河となっています「木の実をた。碧梧桐と浪曼的主情的な高浜 虚子でした。碧梧桐と浪曼的主情的な高浜 虚子でしい。 でした。 というところからなって対して私は 山 林家 が杉とか檜とかをが出て付けるような実地の場合を捕べとか山に植付けるような実地の場合を捕べたが山に植付けるような実地の場合を捕びた。 しかし彼とても子規の門から出たのでした。 しかし彼とても子規の門から出たのでも変を仲々棄て切れません。

空をはさむ壁死にをるや雲の峯

独り忽と戻りぬ飛ぶ登

※徴的な暗示へすくんでゆきます。 む中びて行こうとしています。そこから で、も伸びて行こうとしています。そこから で、実感を感 で、実感を感

心理描写、感情の直写へすくんでゆきま雲を叱る神あらん冬日夕磨きにす。

乙字の示唆に助けられたといわれてい微暗示はより広い視野をもつという弟

はずもヒョコ生れぬ冬薔薇

サイ 紅 棺桶は飛ぶほど賣れるものでなし せちがらいこの世に愛の記事光る パチンコへ舞妓も來てる京の春 錢のあるふりして経 オートバイ医者は病氣を追う様に フトすべらした 先 樂 ブ 幣 嫉妬するならも スパイ今日主義を捨てたい恋を知 生 何 金までは貸そうと言はない相談機 11 ばあちやんの乳房を吸ふた不倖 が理 感 労 生 夜 茶 屋 n 病 B 労 チ 輸 事 レンがまた鳴りそうな空の果 家 では 者 想 げ 間 1= カン 2 團 残 1) してこいと東京行きの汽車 0) カン カ ら春の空氣が揺れて出 つたエ は 酒 篇 子 時化よりこわい刑事の眼 子 日 期 座長もビラをまくひどり 7 かつては讃美歌も唄ひ 事を 上手につぐも女の子 太皷 ご云はれ蝶キクタイで來る 0 ているそうな羨まし 供 0 供 課 待 0 通 か 氣 銀 声 L 切 13 初 つき氣嫌をこりかは 場 シャ 焰はどこへやら 馘の日近からん に新婚取卷かれ 美徳にしてる母 行 3 の姿を母に告げ ついた痛いとこ 拔 恋の 戰爭欲 済 荒らされ 打てる女形 B 語 帖 市 女 入 況聽く どなり しい頃 の名 門 書 和歌山市 岸和田市 高田市和 今治市 大阪市 大阪府 今治市 大阪市 宮崎市 高知県 大阪市 出雲市 大阪市 石川県 大阪市 福角 吾鄉 戸田 秋月 越智 岡本 栗山 神谷凡 高橋 長野 坂 野口卯之助 同 森本黑天子 同 同 同 同 不二田三夫 同 佐藤まさる 同 同 同 同 元馬 桃園 小波 玲人 九九郎 文庫 悅子 宏方 小水 操子 金 こじ 手を貸してやつた頃ある妻の帯 冬物を見切るといふに冴えかへり サ よい処 細君は知るまい氣前のよいチップ 背 やきもちご我れで気が 恥らいを忘れたモデルふどあわれ 左遷ごは言ふまい故郷に母が在り 凍 卓 金語楼のような旦那に落籍される 吾 ゴ 清 4 知らぬ間に煙草のむ子になって居り 初 恐 化粧部へのつそり立つたベレー帽 3 弁と 名 物 0 1: 1= 來 械 1 T 元 風 產 妻 観 L ップもなく青春は逝かむとす 刺 屋 定 ひ 0 0 10 を 化 カ つけたやうに生花題をつけ 0 3 ね を から だ 軽 我 へ來たは飲ませる話らし Ŧī. くい男見合へすわりきり 4. け優しき医師と思ひしに 妻はシャボンの泡にもみ 腐つても山で賣りたがり ス 日記に今日も書いてない 喉 15 過 医師は娶らず三十路越え ば で樂になったがよく遊び もう待ち切れず人形買ふ 0 名 等で 籤場を淋しく出 た手洗水も間借なり 娘 ぎて親類仲が柔め T っても実権まだ握り て尤な 呼ばれん卒 後 盛 モンテンルパ唄 東し りに 味哀れだけ残り T 通 付きほみにがく 汚れなく す 77 n 岡山県 岡山県 米子市 大阪市 大阪市 芦屋市 津山市 鳥取市 貝塚市 滋賀県 貝塚市 大阪市 岡山県 大阪市 大阪市 伊藤 繁松 高木 里田 三木 亀崎 小西 久保 津田 丹波 中江破天荒 竹內雨季舟 同 永田 同 岡野風の子 大塚美能留 同 同 同 同 同 同 同 都詩子 定美 房栄 香平 漫步 千舟 玉露 和友 雄人 太路 + うです。一碧楼の次の句を見てもそれはわ 季感から遠ざかることはむつかしかつたよ

五、五、三、五と切つてみたり んでゆくのですが、その道行きとして す。又彼は無中心論というたば感じをあら たないテーマです。碧梧桐は自由律へと進 ーリキーの「ドン底」のように主人公をも わすような句法にもふれています。丁度ゴ 干足袋を、入るゝ時、客は、酔ふてあ

はず悲劇的結末に終り、 すが、川柳の社会批判よりははるかに調子 よつて自由律は本格化されました。 運動を展開しましたが、両者いずれとも合 原井泉水、中塚一碧楼といもに自由律俳句 の弱いものにしかなつておりません。 性発揮、 るように三個の概念の調和を試みてい とまるで絵に於ける近景、中景、遠景をみ 彼は自分の主張を追い求めながら同志教 伝統の一角を打破つたとはいえ、 碧梧桐は第二の伝統に近づこうとして個 墓所の木に、鳶見る日、凧も遠き空 接社会的ということをいつていま 井泉水、一碧楼に 季題や ま

かります。 思ひ切り走つて若葉の闇へ入つても見た TRUKのやらな浴場がほしい場末の 逃げた靴工が派手な浴衣を忘れてた 楽隊のあとから制服で秋日を戻 八百庄は酔ひ死にし葉柳垂れ

由を求めていることはこれらの自由律のう るということでありますが、 から見られます。 しかし見たま」の写生に終つて、消化燃 麻生路郎先生の御話によると井泉水は 「雪」に掲載された川柳に影響されてい 川柳のもつ自

臨 まいご言に一日酔まで真似られる 家計簿にプラスになったクイズ営 家 多藝多趣味二人は既に知つて居た 身 誕 家計簿の たゞ貰ふ様なクイズが こけしばつかっ子の無い部屋に忘れられ 逢へそうな氣がして映画見に出 比良の風まともにうけてするる 陳開してバスさえ知らぬ子に育ち 舞 送 足 方で ルバイト 時 1: 勝 選 人娘 乏な 母 生. 待 行 扇 别 袋 から氣に喰わなんだと倦怠期 8 b 0 5 簿 燒 日 手 0 して行けば甘党ばかりが居 0 だ 会 意見をあくびにしてしまひ 0 は 0 振つたつもりの話し振り ようにしようごその始め りょ な 底破 1= を か 赤字で済 愛 枯 0 姑 云 囲 母 想 姉 理 5 0 b れたまゝで母の病む へ揉手まで心得る 子 木 から h 5 窓 ^ を忘れた銀座の 形 〈ですご言ふ 肢態 に似たる父隣れ だ ゐるしまりよう で女ばかりなり 0 挨 しく意地を持ち んだ子等の風邪 П りもせ 心 恋 だけ 0 1 拶こう遠ひ 1= しやくになり 中もする を 傍 な + 男する に座し リング る別 であ まれる かけ 和歌山県 和壓山県 和歌山県 玉野市 貝塚市 布施市 大阪市 米子市 岡山県 貝塚市 熊本市 大阪府 大阪府 邀賀県 渡辺あきら 岡本 久保田青竹 潮戶 大塚 勝田 小林 谷口 小島さぎす 美野百合子 高野 丸本 同 同 竹內花代子 花柳万亀子 高橋 同 同 凡太 正郎 夢介 育草 花美 流水 幸子 球 フリ 坪 社 お生憎でしたと八百屋の手の太さ 計 京 初 役 大晦日名残り惜 4 父 嫁は未だ火を焚く丈けのお餅 F 瓷 処女のまゝ 行 驚 犯 干 娘 人 式 闇 5 詣 得 逝 息 算 長 0) 0 5 材 商 0) 人 物 間 持 ゲー 向 器 1 を T に 世 が 3 0 住 から な T 雪 3 * 0 声 から 0 を 0 0 外氣 遠 ふえて夜業もして戻り けば我が工場も夕焼ける 仲近所に見せる晴着きせ 手 りいゝ髭で妓に間違われ み名所も知らず土を生き 無 跳 損 2 Ш て 0) 緣 ト菊の御紋もつくやろか 6 か TE 記 忘 弱 自 3 記 持 病む身青春すでにすぎ 理 を 羊 月 情 遊 故 事 轉 L 5 b n 味 憶 する 田 な 6 ほ 号 12 舍 でやつき就職し ば 氣 車 水 0 1= そうな 3 1: 意 しげにラデオ告げ を 舍 分 に妹あるを知り K 炬燵を覗いて見 急 竿 願をうんと持ち 孤独と言ふ世相 の白く忘れられ 泣 前 の様子見 見も云わずおく 程 言 押 嗤 鎬 4-母 金が欲し 7-哀 雨 2 H L 35 ふ焼香場 がさえ 雪の で削り が落ち つける を降 れなり て帰り 知れ つき 夜 和歌山 岡山県佐 神戸市 滋賀県 岡山県 京都市 大阪府 岡山県 岡山県 大阪府 京都市 奈良市 大阪府 豊川市 高知市 出雲市 津山市 岡山県 尾道市 大阪市 岡山県 大阪市 小坂 西田 松下 國正 難波 生島 土守トン坊 多久和朱扇 々部満佐志 谷口喜久治 菱川 中率 日野加壽緒 長尾 市原 久家代仕男 穂北ペン郎 ち 田雨水 漫多朗 田 辺 南天 眉山 蘇水 燕青 春猿 吾作 芳扇 多

> 的抒情詩人でした。 やはり俳句の流れを外れていない自然主義 やはり俳句の流れを外れていない自然主義

筋立場からぬけ出ることは出来ませんでし が立場からぬけ出ることは出来ませんでし

著者は井泉水門の人ですから、井泉水の活動を是認し支持するのは当然でしよう。これから少し著者の言によつて井泉水にふれてみましよう。

財とまだ文語調をすてなかつたところから力一ばいに泣く児と

井泉水の主張はこうです。

「新傾向の句(碧梧桐以来の句)は自然に「新傾向の句(碧梧桐以来の句)は自然に迫つている……けれど自然の慈しみ、又自然の淋しさがふつくりと湛へられてゐるやうな深味がない……新傾向の句は生活に踏み込んである……けれど人生の喜び又人生の悲しみがしみじみと味はれるやうな深味がない……新傾向の句はとか整つている。けれど句の魂が缺けている。然らばここに缺けである句の魂とは何であるか。私は答へて云ふ——それは光である。力である」(「俳句提唱」)光である。方である」(「俳句提唱」)

柘榴が口あけたたはけた恋だ 放 哉

沖

米

遊 薦 感 行 幸 家の愚痴惚氣もつひでに 伸びる芽を摘まれる思ひ入試くる 新 母ゆきて父のおんぶもうまくなり 老 初雪もこゝまで降ればあさられ 夫 13 淚 三学期になって本氣になったけど 富める子は見せびらかせの着正月 セーラー服もう美容法読んでおり 婚 夜 6. 泊 婦 情 ši 6 け せ チ 6. らくに二号三号の家をたて ナニ 0) 3 0) は 3 か 1= 1 33 n まくらにひびく汽車の笛 入り 8 豆パチンコ玉が入つてた 鐘待つてた様に子が産れ b いけば不満も云いたがり お湯の だけでよいのに飛行機が コの下火新聞だけのもの H 患者を回診もてあまし 湯 本 0 吞の摸様から揃へ 招 を賣つたは若い頃 注 中まで差向ひ 射 待狀を読み返し 針 尖 聞かされる つてる 3 岡山県 大阪府 松江市 京都市 大阪府 岡山県 高田市和 高田市和 兵庫県 鳴戸市 吹田市 淡路市 東京都 大阪市 岡山県 鳥取市 大阪市 豊中市 大阪市 橋本 岡 高 鈴木 光好 中谷 戶田 吉原 原田 唐沢 大西 中尾 岩田 水野水茶花 原 牧絮 山崎帆加夫 小池しげを 大塚五厘棒 天保銭 岡 「麻由美 章 山 つさむ 卓司 紅月 一四詩 幸男 花村 貞教 常雄 薰 子

傘 留 暴 待 寒 自 改 洋 屑 白 守 君 裁 屋 粉 1: 民 炊 札 6. 0 0 番 0 3 0 U は

テ パン食はしても青い眼生むじゃない 如 基 風呂賃が上つたご言うに湯 青二才などと おちいざんと女房にいわれあきらかる かき眉毛みゝずの様にひよこがの しみじみを姉になる子の寢顏みる レビジョンどかつご据えて寝正 地 才 を落 0 も和裁もしますアンケート まだ未練 な 10 子 は 雨 n 信頼があるなど虚勢張り 意 て女の愚痴がうなずける 火 盆 氣 溫 は 雜 は 1= 鉢 挙 T 誌 栽 泉 + T 0 年 ツス位で驚かず 人の 母 3 1: 句ライスに油虫 意見のくい違い の残る探しよう 帰 賀狀 1: 0) 曆 水 0 顏 忘 で 春 た 爲 夜酒走 鋏入れ となり になり をくれ れて居 まで減り 降り 月 豊中市 具塚市 大阪府 鳥取市 大阪府 大阪府 京都市 大阪市 大阪市 下関市 貝塚市 大阪市 芦屋市 岡山県 大阪府 山口県 高田市和 大阪市 大阪府 難波 森 出上 池戶 三谷 米田 小田 高崎 幾島 戶部 松吉 藤井 松村 戸田 手島 中谷八十子 兒島與呂志 彦 北 京花 桃村 柳蛙 玄米 柳叟 雄声 無青 竜馬 南風 呆声 浜小 櫻天 弘改 巨船 大然 鳥 六

1

ツ

ブ

酒

須

崎

豆秋

選

独り来て浮かない顔のコップ酒 明日は又明日の風吹くコップ酒 妻の留守手つ取り早くコップ酒 コップ酒するめの足が噛の切れず 皺苦茶な札つまみ出すコップ酒 コップ酒三杯目には眼がすわり ツプ酒今日は社長に叱られた 主 悦 方 潮 漫

万古人 朴 歩 子 大 花 仙 引 コップ酒人に払はすくせを持ち コップ酒知らぬ同志が肩を組み コップ酒色気忘れた吞みつぶり コップ酒君と僕とですぐに酔い ふところと相談をしてコップ酒 ップ酒呑んでいるので聞き流し 受けて胸を叩いたコップ酒 雨季舟 美能留 1 島 義 浦 叟 占 平 広

やつこ豆腐の夏夕の明るさに庖丁を入れ 哉木

ますが、川棚を作句して来た私たちには大 気になりました。 い川柳の区別を真剣にやつてみようという す。このへんから私はこれらの句と新らし 、んもつたいぶつているなと感じるだけで これらの句をよんで大へん詩的だと思い 咳をしても一人

のようなかき込みがくりかえされはじめま 実際「俳句と生活」 の欄外には度々次

る俳句が川柳に見える……象徴、 見えるのは当然……したがつてらがちのあ 純写生」。 「おかし味のない川柳……らがちのない いずれプロレタリヤ俳句のことをいう時 川柳……らがちの少い川柳が俳句らしく 無中心

ましよう。 としての俳句のところででもくりかえされ に又さらにこの著書の最後の一章民族文学

ゆきます。俳句提唱の他の部分には さて井泉水は「光と力」を求めて進んで ものでもない。天然の中核にある自然と ……自然は主観主義からのみ得られるも のでなく、客観主義からのみ達せられる 俳句は自然に触れることを目的と

けがこうなのではなく、 ゆくのでありますが、何も井泉水の俳論だ となるのである。俳句がめざしているの 外に現われて我々の生活を明るくする光 ……自然は一元である。自然は我々の内 自己の内奥にある自然は同じものである 進めるものである。力である。この力が 井泉水はそこから宗教的心境に発展して にある……それは我々の生活を内から押 我々の内にある自然である。 川柳のもつている

頂

泊の

コップ酒五円のつりも貰ろて去に 冷やの方が良いよミコップ出している コップ酒チップの要らぬ酔心地 コップ酒飲んでるここを子に見られ ツブ酒える酔つてます好いてます 口で飲んで行きなとコップ酒 ップ酒凡人としての夢に生き ツブ酒或る日荷風さんに出あい ツブ酒雪のひどさを言うて飲み ップ酒重役というタイプもい ム長をはいて女のコップ酒 酒弁当箱を忘れて出 酒兄 弟分がすぐに出来 十三楼 しげお 文 同 温 鉄 谷 2 千 同 同 児 水 ょ 鳥 笑 衣

> 酒 息

0

勢

泊

コップ酒一緒に払うと言って去に もう喉をならしてコップ受けている コップ酒飲むかけ悪友知つて居り コップ酒そろしくうるさい型になり 満ち足りた顔で出て来たコップ酒 発車まであと三分のコップ酒 焼鳥の焼けるが待てぬコップ酒 コップ酒まさか村長とも知らず ップ酒捨てし故郷をフト思い ツブ酒きゆうつき出てゆく肩の雪 ップ酒みな善人の顔に見え ップ酒いつもの顔が見当らず ツブ酒商 直な銭を払うてコップ酒 ツプ酒 ップ酒関東煮が冷えている ップ酒十銭の頃なつかしく 呻る片腕な 売道具脇に置き 代仕男 十九平 H 七面山 菩 東 芳 岡山子 格 水 司 花 風 地·親 住・子に飴を買うて帰りしコップ酒 佳・コップ酒明日の生命へ灯をミほし 動・君やけぐそはよし給えコップ酒 天・白秋の詩を知つているコップ酒 地・生きくくと目が輝いたコップ酒 佳・コップ酒咄しをきけば気の毒な 住・コップ酒も ら七年も逢はぬ妻 住・コップ酒女はあいつだけでなし 佳・コップ酒どつこい己は生きて居る 人・コップ酒独りになって泣いて居る 人・コップ酒半分にしてひまがいり 住・コップ 酒 住・行末は風に任せたコップ酒 佳・コップ酒も 5人生に夢はなし 住・コップ酒あほる女のたどならず 人・コップ酒明日は辞表を出すっもり コップ酒別れる覚悟は出来ている 友が欲しいと思うコップ酒 金の鞄は抱いてコップ酒 腫 眠剤と名附けとき 恵二朗 七面山 鮎 萕 トン坊 文 牛 同 H 和 1 同 ン坊 司 仙 介

義理足した一治妻にわりきれず

泊の旅費をわすれた物もら

類

ゆく一泊に米が入り

泊を儲けた夜汽車で風をひき

付のま」で一泊して帰り

泊

泊は

遠縁借りる予算たて

悦

方

泊は夜汽車で浮かすプラン練る

善 友 仙

泊でよし旅の心を落つかせ

和 芳 逸 木 実 呆 水 辫

越

し一睡もせず処女で居る

泊のプランは妻に逆ふ日

褄の合は

ぬ一泊して帰り

魚

酔さめのベンチで初日拝みけり 一泊の宿の戸棚をあけてみる 泊の電話へ風呂もたきつける 泊二日の旅で見事に労れ切り 里に似て一泊のものたらず 流に望み一泊寝つかれず 抜きは一泊だけの里帰り をみながら小屋で一泊し で懲りた宿から質状来る で養子が一泊し 女 は辞めて E 田 翠 光 ゆずる 七面山 選 美能留 万古人 三林坊 十九平 古戦場 平 地・一 五·母 五 軸·心 天•一 玉 人・御一泊の下見へ侍従知事市長 五・冷かされても一泊で帰る姉 五・二泊せぬっもりチップの加減する 予算ないとかで一泊けずられる 泊の 泊の 泊の 泊は 泊はしたし子供は去にたがり 泊の宿からも出す旅だより 泊 得 の亡き故郷一泊だけにする 0 た宿宿帖を持つて来ず 旅へ家計簿つみたてる 旅行へ日本地図も買い 京都へ参るのにのこし お客にしては慣れた方 あまり静かを覗きに来 百合子 トン坊 牛

歩

瓢

郎 庫

美婦適 堂 花 信 声 仙 介 満 郎 占 水 界に達するのであります。穿ちはくすぐり 穿ち、批判性を発展させると真理合一の世 とです。滑稽人の集りと思われる川柳人が 5。比較的知的な川柳界にはあまり勿体が なつたら消えるおかしさででもありましょ をむけるからおかしいのであります。川柳 笑いではありません。もの」本当の姿にふ 案外真面目で俳人の方がくだけている光景 な俳人がやたらに理窟を好むのも面白いこ つた理窟をいう人もありませんが、主情的 のおかしみこそ、世の中がすつかり本当に になっていない現状へ本当の姿の見える鏡 れるところからはじまります。本当のも

酒

くさい口で一泊さんやかれ

泊

で帰る予定も十二月

朴 夢 H IE. 1

泊

の出張ふんどしから替る

泊ときめてくつろぐのみっぷり

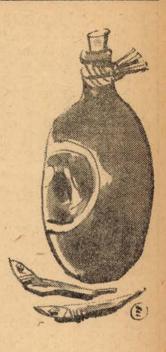
泊でこんなにやいてくれる妻

谷

泊でよし週末を湯につかり

がプロレタリヤ俳句であります。虚子の一 が、彼は花鳥諷詠をつらぬき通さんとして 日の「ホトトギス」をまもつているのです ましたが碧梧桐の革新運動に対し伝統擁護 もまのあたり見たことがありました。 は川柳人の眼から少し批判してみたいと思 た時、成否は別として最も活潑に働いたの がはげしくなつてからは なおうとするのです。これははげしい社会 波がやつてきてもこれを如是と観じ、天命 いるのであります。花鳥諷詠のイデオロギ を決意しました。虚子は申すまでもなく今 います。 派はこれを失敗だといきつておりますが私 於ても同じ態度をつぶけているようです。 は逆効果であつたかもしれません。戦後に という句集を作つたといいますがはたして 意味で当時の為政者の具に供せられ、戦争 の荒波の中にあつて人間を麻酔するという とあきらめてこれに随順する人生観をやし ーは現実逃避であります。どんな社会の荒 さて俳句が第二の伝統に入りこんでいつ 一方高浜虚子は最初は小説の方をして 一の伝統に奉仕したか、あるい 「軍神につゞけ」

児



塩浜一路氏

夫婦相和す齒屬のチューブ

福田丁路氏

紅燈の街エプロンの純潔さ

眞心で贈るキツスの良いボー

111 居

水谷谷水氏

れる。 納得されるのではないかとおもわ はないが大阪川柳の艷態の一面が は、すこしとつびないいかたをす とを考えてみることで、クイズで れば、色町の存在が、大阪という 大都会に色づけしているというこ

は利用されもしようが、大阪ーと の出入できる場所ではなくなって 融け込んではいないのである。 る川場川が、一般の人たちの中に 茶屋という外見は艶めかしくみえ いわず京都でもそうだろうが、お いる。一部特殊な社会の人たちに 戦前のように、われわれ一般の者 のために盛業しているらしいが、 お茶屋もいわゆる公用族、社用族 現在東京には花柳界もあるし、

らでもあるが、東京では戦後の生 奴だが、ほくなど東京下町生れ と――無いが異見の惣仕舞という な場に臨む余裕のないというこ 活が極度に切りつめられて、そん の、わけて花柳界情緒にあこがれ それは大阪が商人の街であるか

ある。 うなものにとつては淋しい限りで をもつて子供から大人になったよ

職人であつた。 酔は、お芝屋で使う刺青の肌着ー 酔という名作家もあつた。この花 らものしか創作しなかつた花又花 作句する達吟家があつた。つまり ら、どんな題詠でも、創作川柳で ル縫いぐるみルを描く極く特殊な た。日く、「花柳吟」である。 も、ことごとく花柳界に取材して しないのであるから徹底してい いらのか、かれの作句意欲は発動 花柳界のことにしか興味がないと 少し時代は遡るが「館吟」とい 東京の川柳家に坊野寿山とい

デルにもつかわれたという変り種 井勇大人の小説「墨水夜話」のモ をあつちこつち持ち歩いて楽しみ じしんは好きな道具類(骨 董) ながら生計をたて」いるという古 娘を一枚看板に芸者家を営業して の名取、現在、下谷池之端で一人 と謳われた美人で、もとより長唄 寿山は細君が新橋七人組の一人

ら別格としても、戦前には東京の である。 は東京でも特殊な存在であったか 花酔、寿山というような人たち

雨吉のごときは、現在でも 炬燵から出て弾初の三味をと

るものはすくなくなかつた。河柳 川柳家で花柳界に取材して作句す

一つ寝のおそい眼があく雪の

はないにしても花柳界に直結した 句を発表するのである。 というような、花柳吟そのもので 路郎先生の

ただ歩くだけの戀にも春が來 飲みに來たように大原態にな

製たる世相をいくぶんでも、うる 限りというべきであつて、この弦 とつてはまことにうらやましさの か。――こういう世界は、ぼくに とばの裾模様がちらつくではない ぶんと芳香を放つ難の美酒や京こ という最近のお作には、句の裏に

ら

態態川柳が、

どしどし

創作され う麗わしい世間でもない。 のではもちろんない。またそらい のぞんだり自だらくになれという てい」のだとおもう。何も遊蕩を おいあらしめるためには、こうい

川柳もけつこうだが、一時代前の

ならないとおもら。関東流行の詩

ぼくは川柳には色気がなければ

ありはしないか。 されつくあるという事実とほくの いら名の柔かいテーマの作品が戦 後生れ出て、今日でも旺んに製作 いら艶態川柳とは一脉かんれんが 小説のデヤンルにも中間小説と

クしておいた中からぬいてみる。 中島生々庵氏

本誌二月号川川柳塔川にチェッ 寒むがりの寧主へつき矜見せ

山根白星氏 正本水客氏 水谷竹莊氏 今日も亦師匠は供に男弟子 女よゝと泣いている間の手持 母の代からの好みのさくら炭 二号とは言はれたくなし

じられるものである。

いが、何か仄々とした雰囲気が感 も紅燈の町につながるものではな

これら諸作家の作品は、必ずし

決心がついたか女飲むと言う

てい」とおもう。ぼくが、ある句 気のきいた、色つぼい作品があっ 作家が好んで作ったような、粋な

会で、『師弟愛』という兼題で創

陸で踏む足音舞台同じ音

通人であつた。 花柳界のことに明るい、その道の というのがあつて、いさ」かりど 目慢』の句だが、この時の選者は

うようなこともあったが、 戦時中 こしは洒落のわかる、そうした面 でわれわれ川柳作家たるもの、す 面でのベース・アップから、色よい 作風となつて、今日ようやく収入 ために家庭争議をもたらしたとい るためには、茶屋酒の味を知らな 川柳が生れるようになった。こ の軍部御雇から戦後の貧寒極まる またをはいかいしたもので、その ければというので盛んに紅燈のち 東京では、ひところ川柳作家た

と願うものである。 、のセンスをもつ作家でありたい

つた想いだつた。 感じが銀座八丁を領しているとい るくらいのもの――むしろ淋しい の前のテレビに人だかりがしてい で暗いところが多く、たぐ電気店 く歩けるようになったが、大店の た。夜見世が撤去されて舗道は広 戻りを、久々で銀座を歩いてみ 重く感ずるのに浮かれて、つとめ ばかにあたゝかくオーバアも肩に だまだ寒い季節である筈なのに、 避扉は日暮とともにおろされるの 昨宵、寒が明けたとはいえ、

るほどである。 これで暮らして行けるとおもわれ そりとしている風ぜいば、よくも らず客もあまりなく店の者がひつ の店屋が、明るい照明にもからわ 間物や呉服るいをひさぐ粋な構え ラブといった映画のセットのよう な外観の間口の広いのやせまいの ヤバレーやナイトクラブや何々ク されないようなフランス語やギリ シャ語でもあろうか、そうしたキ 百ながらの花棚界のひと相手の小 や種々雑多なネオンや螢光燈のつ 裏通にはいると、そのイミも了解 た店が櫛比していたり、または 表通は、かくの如くだが、一歩

譹

ほめるものなし客間で考える

灯のギンザ空洞となり襤褸う

せかけだけのアメリカのにせものまつたく、中身の空つぼな、見 で充満しているギンザである。 川柳的取材を得ようとするには こういう幽気陰々たる灯の中か 一ポケットマネーがモノをいう 陣

> ツギの当つたシュミーズが想像さ としても、華やかなドレスの下の ٢ い。よし虎穴に入つて虎児を得た ぼく如きには手も足も出 いが、せめてぼく如き老残の身の れよ」などと応酬しているのくら

れては遊興の気分も起らないであ 楽しみである。

今日の青壮年の人たちが、どんな 置いていたのと比べて、はたして

ぼくは時たまの日曜を

だから、

いろいろな華やかな場面に身を ぼくじしんかえりみて壮年の頃

前 伍 健

老らくの血色よくて寂しけれ 船ばくちボーイ素知らぬ顔で過ぎ 船ばくちさくらは意外娘たち 大阪市 麻 生

日の惜しさピリオドうつて寝る 丁とおもてか猫がつきまとふ

社交のやうに女は嘘をまぜ 結婚の感想ぜめのよい女 洋裝が似合うと云へば爪も染め 大阪市 本 綠 丽

近

舟

同

腰掛けで飲む上役は知れたもの 長野県 峰 柳 兒

減税えすかさず保険屋座り込み クラス会儲け頭がまた変り 席で家族手当の取り頭

れる。「もつと若い人にたのんでく ク開けてよ」などと笑いかけてく らしていると、ストリッパアの中 には「小父さん、こ」のチャッ いわゆるカブリッキで白毛頭をさ トリップ・レヴュウを見物する。 浅草の與業街にまぎれ込んで、 ス 何と批判されるであろうか。

もわれてならない。だが事楽は青 つたら、今日川柳界の中堅層から 陽気に浮かれてもらいたいーとい 壮年の権利であるから、どしどし まり大したちがいはないようにお 享楽をしているかと考えても、 神仏分離の為に府社開口神社 る事が認められた。明治の初年、 も異つていて、その大工の非凡な と云つて塔の三方が構造も、彫刻

と、大寺さんを分離する議が起つ

らにほかならない。 少しでも明るい方へ向わせたいか このくさくする気詰りな現状を るぼくの真意が何であるか、賢明 な諸子にはおわかりであろうが、 若い川柳界の人たちをケシかけ

くれ――と繰りかえして老の繰り 言を終ろう。 明るい、色つぼい川柳を作つて (二月十三日)

とつての恩人である。

III ス ピリ 塔 " 1

十年後の今日巷間「みすみの塔」 完成した塔なのである。百年百五 は「今に見ろ後世に残す塔を建て て見せる」と心血をそろいで遂に 嘲笑した。これを聞いた二流大工 工に何の大寺の塔が出来るか」と 落札しなかつた。そして「叩き大 が二流の大工で、一流の大工には る。その昔、この塔を建造したの が、この塔は由緒のある塔で の塔に関する放送を中止され で倒壊していた為、BKからこ 踏に来堺されたことがあるが、風 の秘話を世に紹介されるため実地 た。昨年のこと路郎先生がこの塔 堺に大寺の塔と云ちの 7: あ あ た

買い求めて開口神社に寄附したの 題は解決した。その点・ が、葭乃先生の曾祖父河盛仁平翁 て塔の移転取除けが問題に た」なかつたのである。それで間 た。その時、この塔を大枚五円で 堺県令も河仁の旦那には歯が 翁は塔に ts

らないこと、この叩大工の如くあ りたいと思う。 を創るための精進をせなければな の塔を夢み、川柳塔を築いてゆく 為に、一句を遺し、いのちある句 塔を築けないが、少くとも、象牙 めは「川柳雑誌」のスローガン が、それは此の叩大工の心と相通 れ」「非凡なれ」の先生のいまし じるのではないか、僕等は永久に 「川柳雑誌」のスピリットである 「一句を遺せ」いのちある句を創 「一本のマッチが消ゆるまで」 それにしても私はいつも思う。

木摩

天

郎

(昭和二八・一・三)



何

化政 保 低 調の 因

野 鞍 馬

亡くなり、文化二年(一八〇 年(一七九〇)に初代川柳が 後勢力を持つていた文日堂 年の七十一編に一寸選が見え すぐ三世になつたが、文政二 政元年(一八一八)二世沒、 四十編からその選が見え、文 五)二世立机、「柳多留」三 が、賤丸を四世に据えたと推 花久も二代目になり、初代沒 るだけで引退、その後は板元 柳多留」が発刊され、寛政二 明和二年(一七六五)に で、その時の 扇日傘でにぎわしい菊の御所

出た二字を句に詠み込むの結」を出題した。これは題に して、乱題という、つまり雑 即題」として思いつき「二字 二月二十八日の会に、「当日 ころが文政九年(一八二六) 吟も作らしたのであつた。と を称えてから色々指導方針も 丸は四世川柳となつて、狂句 工夫したらしく、題詠を主と 文政七年(一八二四)に賤 堂を四世とが選をし、左の 「君、吐」を出題して、文日

「扇、菊」が出された。それに 小菊の花も扇屋は八重にちり 題は「虎、鯰

黄疸の虎斑に見えるあせ鯰

だけ四世の選に入つている。 というような苦しい句が三句 して「蓮、德利」「池、蛇」 好評だつたので、又翌年六月 法であるが、一寸思いつきで 八日の若竹会で、即吟即判さ この作句は非常に難しい方

が二人に入選している。 徳利を打首にする蓮葉歳 (1011)

桜ケ池を覗いてる蛇いちご

光る君反吐の出そうな村芝居 辻君の朝湯夕べの客を吐き

何れも苦しい詠み込みで、た の入選句から拾うと 七)十月二十八日の武蔵野会 に行われ、文政十年(一八二 る。その後ずつどこれが盛ん 度が好評にもなつたのであ 然し当時の風潮としてこの程 だ即興と手練振をほこる位で 句は望めないのであつた。

葬式を海でするのが一の谷

二合半紅葉番所でしかときょ 番、

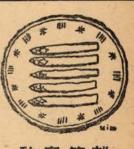
竜虎の勢ひ割箸を嫁が割り

男の鳥追吉田屋の見世へ来る 一吉

見え、文政十一年八月廿八日 の会には とだいぶん馴れたようにも 云

杉下駄で敷居の高い朝がへり 江島の寝所蒸籠を餅につき 一杉 高

稽古所の袋戸棚は文字で貼り 一一方,古



考えた 私は川柳を斯く

交 笑

日

らく世間一般に最も広く知られて ろが、柳界に一歩踏み込んで見て 当らない同人雑誌など、もとより ようにわざとおかしく作つた文字 れも深く考えずに笑話などへ同じ いる句であろう。川柳とは先ずこ 私が知つた最初の句であり、おそ は、大衆雑誌に於ける漫画とタイ 自然我々の眼に最も良く触れるの 比較すれば極めて低調であるから 知る筈もなく、新聞柳壇も俳句に 図書館や書店を隅なく探しても見 の遊戯位に考えていたのである。 んなものであると考えて居た。そ あり感激あり、およそ人間生活に 驚いた。そこには思想あり生活駐 アップした娯楽川柳である。とこ "居候三杯目にはそつと出し"

詠み盡す事の出来ない未知の世界 深めている次第である。 つて益々川柳と共に生きる喜びを がある。それだけに日を経るに従 を見る事が出来ず、幾ら詠んでも

らないからである。 る。だから川柳をやつて居ない人 の中間を行つている様に感じてい 以前に考えていた川柳と、俳句と だと云う。それは本当の川柳を知 ずに居れない面白い句の方が好き ような、一読してブッと吹き出さ 云つて驚く。そして古川柳にある を見せると、「これが川柳か」と に現在柳誌に掲載されてゐる川柳 現在の川柳は、私が柳界に入る

縁のあるものはすべて何の束縛も 進むべき方向を誤つているとは思 う。が、川柳には俳句に見られな 見えるのも無理からぬ事であろ であると考えている人には、そう 域を侵害し、あたかも川柳本来の 然の発展であつて、何等昔の川柳 わない。古川柳と趣きを異にして ると思う。私は現代川柳が、その とも私はそら信じている。又、日 人がある。川柳が漫画的な滑稽詩 道を誤っているかの如く批評する ふれている詩性川柳は、俳句の領 ては、川柳の方が遙かに密接であ 常生活、庶民生活との関係につい い川柳特有の明るさがある。少く に引き戻す必要はない。 いる事は事実であるが、これは自 俳人の中には、近頃の柳誌にあ

か。しかも何処迄掘り下げても底 なく自由に詠まれているではない ら、急に面白くなくなった。と云 読売時事川柳の選者が変つてか 「月、懸」

山科のお客一力屋で遊び 一一一

等が見え、二字を詠込むため 京桝屋いよ大きいは気に当る

身体が大きかつたので、「イ 三桝大五郎(京桝屋梅笑)は の「京桝屋」の句でも、三世 この「二字結」の句を知って 難解ともなる惧れがある。右 置かない
と誤解があったり、 つてある。それで古句研究に にすこし無理な言葉もつか

返舍一九も選に当つている。 様として当時文壇の流行兒十 世の外に数人の選者で、お客 字結」ばかり十題出して、四 の字を入れているのである。 あるが、「氣に当る」と「当」 たく思うであろうというので その年の十月の会には「二

吉の字の官位に遠し稲荷町

一町、声

霞から秋風までは長いらそ 「木、分」 1111

木から落ちた猿は過分の出世

なり 屁のやらな尻を持出す馬喰町

記錄が「柳多留」各編に見え 十三年には各会で行われた 松花堂如件にはむかず

こうした流行から、文政、

年に一度月夜も闇に懸を取り

金谷立無間で屋の飯を喰ひ

味淋酒で真つ赤誠の面よごし 酒

草双紙より買初は宝船 「草、宝

一つ家も昔語りの石枕

「南、

鶴沢の糸にたるみし江戸なま ず 梅ヶ枝は南鐐などに月はかけ 江、鶴 11

けられても、何だかくすぐつ ョ大きい!」とほめ言葉をか

月十一日の和親堀会には 文政十二年 (一八二九) 三 大和屋のお初きどりで下女目 「初、和」 「冬、成」

住吉も山崎町のこけごろも 成田屋の庭に似げなき冬牡丹 任、出

夢心地目をとじて越す大井川

赤穂の浪士追々にへりがたち 「赤、追

椀久と藤屋はいくじない男 摺、長

小式部の便り尋ねて赤面し 御廊下で国の摺合ふ長袴 "

青海苔は藁で結んだ島田髷 二一六 11

行けども~~一里ある田舎道 七賢びつくり後から虎が鳴き (1 / N)

今ならば山師といわれ滑川 白眼玉とこばかり誉めてる百 (一一九 "

時鳥夢を二つに切つて見せ

である。

鋳物師が地雷火おこす仕そこ 兼好の名はつれんへの草にも 「師、地」

> 柳としてどちらが良いか私にはよ 相違も関係しているのではないか 問題でなく、東京と大阪の作家の くわからぬが、これも選者だけの 的見地から云えば面白かつた。川 いて見ると確かに以前の方が娯楽 つて聞かせた友人がある。そう聞 と私は思う。

は、幼時より絵本柳樽を愛玩した も、川柳興隆を志した唯一の動機 優れた句の事である。井上剣花坊 はいけない。勿論こゝに云う「良 くても、良い川柳に絵を附したも わかる川柳」が真の川柳と云えた は読んでいないが、「絵があつて 柳にひきつける上に於ては、重要 をして川柳に興味を感じさせ、川 このように絵を附した川柳は、人 ことからであると云つているが、 い川柳」とは絵がなくてもわかる のを俗に云う漫画川柳と混同して 漫画川柳について諸先輩の評論

が、川柳の道に入つた抑々の動機 云ら私も、谷脇素文の「いのちの 洗濯」を知人から借りて読んだの な役割を果していると思う。かく 次に絵は別として、文字で表し 句ではなかろうか。

感じたこと思つたことをその儘書 以上、私が川柳を始めて一年間

せたし でえみ さけのいきつまこをうるさがら 子のねいきこけしもちがいだな 好啓児 同

らかと思う。

と思う。 この句を一目見た場合、 を理想としているが、併し で、句の内容を知ることができる が使用してあれば遙かに短い時間 法名にかわりし母に掌を合わせ 私は、常に明るい句を作ること 若し漢字

老母ついに逝きて日記は白きま 薬光

た薬光氏にして、はじめて詠める 常に母を忘れず母と共に生きて来 切々たる心情に思わず頭が下る。 などの句を読むと、亡き母を慕う 同

かるように作句すべきであると思 せずに、仮名ばかりで書くのはど う。が併し、耳で聴いてわかる句 るが、川柳は耳で聴いただけでわ た川柳と耳で聴く川柳の問題であ だからと云つて殊更に漢字を使用 がないのだから情けない話だ。 云うのは言訳であつて、本当は銭 と勉強して見たいが暇がない、と の御批判を仰ぎたい。川柳をうん 輩にして果して、私の見方が正し いて見たが、もとより浅学不才の いかどうか甚だ疑問である。諸賢

本牧の鼻をくの字に曲り船

髪置の芥子に小蝶の名古屋打 数馬から夜なー〜通ふ五条橋 木余りを入れて婆アは七あみ

"

大名の家主になる御本陣/ 谷七郷に其日待つ枚生会

口上もあとで云い足す子の使 遍昭も蟬丸も出る大法会 「足、上 二三八

長兵衞に白柄反りは合いかね

二はい目はまだ気楽だと居候

"

日高川十方くれて鐘の中

「日、方」

三年の成田大会の句で、百二 年にも、相当行われていたで のであろう。その後の「柳多 然後廻していうことになつた 十二編から二十七編まで占領 あろうが、「柳多留」は天保 しているので、外の会のは自 八三三)の作、で二年にも三 上には これ等の句は天保四年

絵双紙へ引札を書く仙女香

(1||四

「女' 引

大事家鴨よう~一間飛

一大。間

け

出格子へ手拭ちよいと幕にか

素天窓へ追手のか」る奥家老

宗盛の伸びた鼻毛を熊野が抜

花の上野は筋違に伊賀が見え

「見、違」

植え り茶の木をたんと

拾つてみると、天保八年一月 なつていた。試みにその句を

れていたことも大きな害であ

「二字結」の作句が永年行わ

土弓場に目立つ娘の左利き

一月

一身、

山

ッ身の附紐しめて山を見せ たものを察しられる。 この「二字結」も下火になつ これ位で、天保五年からは

ある。又剽窃句の多いのもこ と一概にいわれているその因 局狂句のプラスにはならなか のためではなかろうか。 にはこうしたこともあるので つたのであつた。狂句に堕落 十年余続いたこの流行は、結 それにしても文政九年

け、別に作者の合点天地人 から、天地人甲乙と順位をつ 句をして発表し、合点高点句 選者の合評の高点から、通り 継いで行つたようである。 る趣向が催された。これには 四世川柳を「梁山伯首長」に から、「衆評通り句」という 天保八年立机の五世もそれを 水滸傳の豪傑の名を当てはめ 保四年から毎年これを催し、 現れ、真砂連三箱の主催の して、合点成績順に各作者に 「水滸傳会」が評判になり、天 それから又別に天保六年頃 そこで趣向の変った方法が

の会には

天

二六二

麻 生 路 郎 著 水 武 書 房 版



川柳を研究したい人々に好適の書

」から説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心 者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコッを会得する である。敢えて一読を薦む。 ことが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書 指導書として唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか 本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新 B六版 (二一二頁) 改正定價一三〇円 送費 十六円

取次御注文は 大阪市住吉局區內污代西五丁目二五 棋物中座大阪七五〇五〇 柳 雜 誌社

と句と作者と二様に天地人を 選者が同じ集句を見ることに は二字結はなく、いくつもの 課題吟を一つにまどめて、各 つけたことも催された。これ 多留」三十二編以後には住 狂句を称されて堕落した。「柳 という風であつた。 原因についての一考察として 句がない。等さいわれている 天上佃 文化、文政、天保を前句が 人 地 小松売先づ我春を二本のけ 出る月も入る月も有る水車 相 地一三箱 人一高麗 11

殺された欠伸涙に化けて出 うに調べてみたのであつた。 出來ないであろうし、トンチ なると仲々難しいのである。 そして「二字結」をはどんな と佳句は得られないである 試みに作つてみてもよい句は 今若しこれを現代川柳作家が ものかどいうこどを以上のよ 余程出題を作句に注意しない ているようであるが、これも 一字結は現在でも時々行われ 教室のようになってしまう。 仮りにこの「一字結」を作るさ つたことも知つて置きたい。

なればまたありがたいことで この拙文が現代作句の参考に 金庫丈けぼつつり残る火事の跡

の火事近所のビルが顔を出

イ職弁弁弁弁弁 でも 一のをへののが で朝笑電お頃腰のふ車隣な知りつ 1 一に乗る腰弁性の意気が合ひ、 に乗る腰弁組の意気が合ひれると云ふが 如く株あがるを かしい 盲判 一人育で上げ 独り へ鮎成幽同成博同悦 元げを

投稿規定

社 切毎月二○日▼投稿先本社宛確▼開催月日及場所記入▼締にの日▼投稿先本社宛



二月二日(土) 午後六時 早春の寒さも作句道場へ集る人達には 開題ではない。市内や郊外の柳人 は 勿論 ま都、神戸、高田寺面からも多数の 出席者があつた。路郎師の御話は「句は時代の反映である」という事に就いて述時代の反映である」という事に就いて述時代の反映である」という事に就いて述時代の反映である」という事に就いて述時代の反映である」という事に就いて述時代の反映である」という事に就いて述時代の原子値に、淡舟氏の句に評釈をこっちみられた。席題、兼題の披講後不朽洞賞優賞カップは黒天子氏に 渡 された。閉会九時(幹事) うどん屋 弁でたたき上げたと廻り 井で 小さく資本主義へ生き弁の 件 軸を 買へ と 云ふ舟の 存 軸を 買へ と 云ふ舟の 涙もろ さを笑われる から今に腰弁つづくなりが で来た郎 党が馘にされるで来た郎 党が馘にされる で来た郎 党が馘にされる で来 た郎 党が馘にされる の 停 鞄 を 買へ と 云ふ でのなじる腰弁まだつづけ ぬまゝ腰 来て腰弁は羨まれ 5 弁裏は老け 上り係長 せがつき 駄を 訳で 路黑水摩没木喜三 天食 天食 久郎子客郎子声堂司 たしか七面しを将山 同路

市

水浸しにされて隣で消えた火事直ぐ消えた火事を不足に戻って来 類焼 くすぶつた顔へ炊き出し届けられ すは火事へ老婆位牌を持って出る 物足りぬボヤで消防気が抜ける 消防に無駄足させるボヤで済み ボヤらしい鼠そろくく戻ろう 船火事へ野次馬ちよっき寄りつけず 思い出の山山火事になった記事 燃えるもの皆燃え火事場雨になり 丸焼になるとも見えぬ船の火事 屋根で見た火事朝刊の隅にのり 逃げおくれ牛はつしてに火葬され 一級酒もまじってござる火事見舞 のような堀立小屋の火事 の広さを見せて板囲ひ 題 いよ代談士からの火事見無 断つた日に火事に会い 土井文縣 ゆ句紫句牛一圭玲 ず る軒香軒歩瓢三人 喜悦春满博帆青梅木 佐 加 堂子巢志也夫柳志声 しげを へとち

薬局の自家も少し風邪をひき薬局の自家も少し風邪をひき薬局の音に年寄り類り切り薬局を見限つた頃は胃潰瘍薬局できました要の頭痛り切り薬局できました要の頭痛り切り薬局できました要の頭痛胃潰瘍薬局できました要の頭痛胃潰瘍薬局できました要の頭痛胃潰瘍薬局できました要の頭痛胃潰瘍薬局できました要の頭痛腎が変易がある。 薬局の裏から見れば水が売れ薬局の裏から見れば水が売れ薬局と縁の切れない別荘の児薬局は別の袋に入れてくれ薬局の中でも少し風邪をひき水場では、一緒に入つて来る。 として 避妊薬 しん いき として 避妊薬 しん いき として 選妊薬 しん いき にんしき いき しん いき にんしき いき しん いき にんしき いき にんしき いき にんしょう いま にんしょう いき にんしょう にんしょく にんしょう にんしょう にんしょく 大事 局のくすりをのまし父を待ち を 痢 ンシーの 局はこう飲みなさいと口をあき C 6 の病気薬局ですましとき いしい薬局あわせてる にと薬局の窓直ぐ閉り 気まりの悪い 客へ薬局すばしこく 薬 前退 三香正紫一紫勢圭

御先祖へ失火を詫びる墓参り おとろへた火へ消防車皆揃ひ夜がらすが鳴いて余じんまださらす 風向の変つた火事にちとあわ 焼け跡へ猫どこからか舞ひ戻り 大火事に消防署も焼け出され チーへと歯の鳴る夜の近い火事 次馬が黙つて見てる火事の の口をうるさが 心巢選 文た青 蝶し柳 黒天子司 都詩子 都詩子 しげを 子

冬山の魅力今年もとろんで来 紅強く 引いて夕暮をのし歩き 日紅 がついた煙草にある魅力 好きなれば癖も魅力になって来る 魅力なんぞでんでないできられて来る 魅力なんぞでんでないできらながら 素足 にも玄人上りと言ふ魅力 金の 魅力へ善人に成り切れず 金の 魅力へ書人に成り切れず 金の 魅力のなかのリンゴむく 女事務 白いマスクにある魅力 子の出来ぬ妻えらずで来た魅力 子の出来ぬ妻えらずで来た魅力 があがだがどこか魅力がきるもとい 母にない魅力を娘もちあわせ が 割る金が出来 で売つた魅力にそむが出来 かが 割る金が出来 の魅力田舎を捨てさせる 「魅 潮喜博水夢梅春天句香し鮎幽紫凡喜圭香圭香文 久 花堂也客裡里巣貧軒林を美王香郎堂三林三林蝶

大正 地図かいて集金にやるもどかしさ 今更に負けた事を中知った地図 もう一度塗り変なる気の世界地図市内地図中にもめてる捜査班 修学の旅行それん、地図を持ち 青雲の上京地図を派手に見る 応接に地図あり選挙に出るっとり たよりない地図で故郷から探して来 きつちりと地図まで添えた招き状 えんりょなく区割 泊のブラン楽しい地図にする 界地図背なにアイゼンハワー 正の時代の地図で尋ねて来 切なポリスの指が地図へ向き の旅行は地図を手放さず 邀り変える気の世界地図 一地 整理を地図へ引き 正本水客選 水一珍紫玲淡圭香幽潮同井圭の 第三 る花巣 客十人香人舟三林王花

春

巣

会場の火鉢が壁草盆にかわつた花にも 遠くない暖かさである。出席者の中には 速を温める句会でもあつた。 医から足を伸ばされた柳人もあつて盛会 だの労をとつていられる大森風来子氏の 任の労をとつていられる大森風来子氏の 任の労をとつていられる大森風来子氏の 任の労をとつていられる大森風来子氏の には が変を温める句会でもあつた。 路郎師の柳 が表記であり、更に柳 で、和歌山県の谷水氏の句を検討さ で、和歌山県の谷水氏の句を検討さ で、おいて述べられ、句評の がで、 の本語の がで、 のおいてが、 のいまが、 のいなが、 薄絶踏 給景切 父さんの背へ悲鳴がしがみつき 悲鳴にも名医のメスは手も見せず 悲鳴またあげて算盤持ちなをし まただつか近所は悲鳴聞き流し 咬み合うた末の悲鳴はうちの犬 悲鳴あげると必ず助けに来る映画 オフイスの悲鳴られしく椅子めでる にたくと女の悲鳴聞いて居り 迷宮入り隣りも悲鳴聞かなんだ 本社三月句會 三月七日(土)午後六時 0 の頭上を北の風が馳け 悲鳴残してバスは行き 悲鳴よかつた顔になり 悲鳴の続く勝手元 匹妻の悲鳴を叱りつけ 悲鳴のれんの内に住み 鳴を上げる十八九 一悲 松江梅里選 一句 一句正木幽 都圭少夢句番圭水一句一句正木幽巣 詩 子三将裡軒茶三客瓢軒十軒則声王澄

かんじんのことに筆まめよれて来* になまめを一人残して皆んな去に 筆まめと言われてクイズ狂淋し 筆まめが引用してるゲーテの詩 便箋の裏まで書いてまだ足らず 甘えてることも筆まめ代筆し **筆まめに春雨止もうともしない** 筆まめな妻でごはんを待たされる 筆まめは長屋に住んで使われる 筆まるでオフィスガールかご聞かれ 筆まめな彼奴のお蔭で叱られる 三代に亘る日記を今に書き 筆まめも日に遠くなる借が出来 筆まめな妻に質状はまかしとき 筆まめの故郷の母には疎遠がち 筆まめで世話好きで又よく動き 枚のはがき筆まめ足らぬなり まめが今日の景色を便りする まめの方が階級下であり まめの当字も二つ三つまぜた 巌を貰へとまめに母の文 筆の筆まめ故に親しまれ まめな男女にきらはれて まめな性を買われる女秘書 欄面識のない友が出来 凡九郎 香紫帆天幽牛 加 林香夫国王歩 喜久堂 き葉文 子路蝶 喜ゆ少久である。 アート 古城山的 点子

筆まめは返信科も添えてくる 玲 要人は手紙マニアーの名に恥じす 潮 在 要人は手紙マニアーの名に恥じす 潮 在 要を まめなくせに外出ぎらいなり 筆まめなくせに外出ぎらいなり 業まめなくせに外出ぎらいなり でままめなくせに外出ぎらいなり でままめなり日もポストへ入れだれて でままめが今日もポストへ入れだれて でままめが今日もポストへ入れだれて でままめの他の香りが流れて来 でままめな初恋 遂に 成功し 省 筆まめな前へばむつつり迎ぐれ を禁まめがラブレータともうけごもれ を禁まめがラブレータともうけごもれ かずる

「筆まめ」

納税に来た に窓口そつけなし 窓口をしめて役所は退け仕度 子へ送る小包窓口一枚の札へ窓口 其の窓はあそことベンの尻が指し 段取りが出来て窓口さつと開け 窓百窓窓 預金みな出す窓口にそつと立ち 口へ横目ながしてコンパクト 口でかみつくような髭が見え 口円もの 口 口 D 口 口口 の動も窓口二度数へ へ来て気がついた日曜日 のはの へ今日は預ける通帳出し 死を知らす窓口淋しけ 応待ぶりがお気に召し 親切はんの掃除をし 電報だ 規則通りで事がすみ 春に気付いた花を挿し い客窓口でほつとかれ 包 を窓口から覗き ひプンと来る けの日曜日 音をさ 小さすぎ 黒川紫香選 耕木凡季田春 児声郎養作巣 風満佐志 香牛千雄十 九 林步流声平 喜久堂 山茶花 みのる

出席者=路郎・古方・一十・潮花・一點清流坊・牛歩・遼杖・勝己・幽王・井清流坊・牛歩・遼杖・勝己・幽王・井清流坊・牛歩・遼杖・勝己・幽王・井木声・ひろし・扇子仙・玲人・鮎美・木声・ひろし・扇子仙・玲人・鮎美・木声・ひろし・扇子仙・玲人・鮎美・木声・ひろし・扇子仙・玲人・鮎美・木声・かろし・扇子仙・帝子・都許子・本声・がなり、

筆まめであつたが恋をとり逃し老嬢の筆まめ妻も笑ろうて洛み

みのる

愛妻の詩を読み耽ける灯がられし 初恋の人と暮しておとこ病む愛妻は傘一本で迎へに来 愛妻と来たデバートに草臥れる 愛妻を亡くしてからのコップ酒 愛妻に死なれてからの皺が増え 愛妻が胸を病んでたあわてよう 愛妻かどうだか自分わからない 二次会を内の奴がとひとり抜け 愛要家と言われてるらしいうちの人 愛妻家のろける程にいたわらず 倦怠期などは知らない妻を持ち 多妻の叱らないのが身にしみる を一人もつ愛妻の手は荒れる かぼら一人息子が案じられ 要の白髪みつけた日の騒ぎ 妻と一緒に起きた日曜日 妻家妻の病気を共に病み 立をせよと愛妻勝気なり の出迎えがあるにわか雨 と日曜あるくだけにする 好みの服にして出かけ ア凡梅水牛勝竹 1九 ト郎志堂歩已荘

窓口の向ふを腹を立てたらし 幽 王窓口の向ふを腹を立てたらし 幽 王窓口のボーンひつかかり へ 淡 舟窓口の声に番号札を見るまゆみ窓口の声に番号札を見るまゆみ窓口の声に番号札を見るまゆみ

版写謄田阪

二五村田芝区北市阪大

会商田阪靉

番一九九五 島福 話 電 番 四 ~ 一 三 六 五

男ざかりそろく日本が狭ったり

あきらめの早さも男ざかりです

ざかりを男がほめた宵の口

幽鮎淡

ボスが

栖も工階たしかな灯をこもし

階には一

一階の鼠住んで居り

圭 梅

寝に上るだけの二階に裸婦の額 パンを焼く包ひ二階の共稼ぎ

扇子仙

聞込みの刑事へ帯をぐつと締め

ップ酒聞込みの手が冷えている 込みに来る本妻の如才なさ

水

番

帆加夫

かんぢんのとこ聞込みへ笑っとき 聞込みへ長屋はみんな智恵を貸し 隣まで来た聞込みの腑に落ちず

文 圭

香

王美舟花

小

娘に男ざかりを養われ

ンペンの男ざかりは口達者

帆加夫 しげを ゆずる 帆加夫

ひつそりとしても一階が気にかかり

寄

8

子供も一階に在る酒場

Œ 梅

則 志

一階から子はバイノーの掌を伸けし

六竜子 ゆずる ひつそりとした一階から月をほめ

男ざかり損を見越したい、返事

酔うて来て男ざかりをもて余し

きのこす男盛りの闘病記

拾ふ男ざかりをあやしまれ

宣 悦 静

介

子 馬

表

ねんねこの男ざかりを惜しまれる

何 留

数と 守番

思

へど男ざかり過ぎ

の男ざかりをもて余し

聞

要の気になって小さな花を植え 愛要へフンー 文化人こして知られ愛妻家こして知られ 妻に甘え微熱の風邪に寝る 妻家 妻 要の息子を母ははがゆがり 妻をこまつた奴と外でいい 要の人気嬉しく気をもませ と猫とお酒が待つ我が家 の父の 電話 趣味へ一日お供する 同志酔わない程に飲み 響 大阪弁もよし を子等笑ひ 十字路 きさ子 幽 木 花 水 雅 万 王 声 客 兼 楽

> 雀 未 日

男ざかりスリルが好きで叱られる 御近所が男ざかりへ世話をやき 男盛りあつさり自殺してしまひ あの頃が男ざかりと子に聴かせ 腹でゆく男ざかりのふところ手 十日男ざかりをもてあまし 沢山男ざかりの手に余り り椅子男ざかりの髭を置き 床に男ざかりの血を燃やし 「男ざかり」 中島生 文 竹 勝 水 勝 柳 天 嘉 一々庵選 秋 万 蝶荘已堂 楽費 鮭 窓

> 新 階

半 男さかりをモンテンルバの欄に泣き まだ若いなど、俵をかつがされ 男ざかり素直に女房のでちを聞き 逢いに行く男ざかりの嘘に馴れ 玉に男ざかりの手をひかれ ざかりが履歴書ばかり書き 莱 勝 竹 文 己 荘 十 蝶 瓢

二階借 言ひ切つて降りる階段音をたて 集金へつんぼになつてゐる二階 お二階へ行くスリッパの夜の馬鹿 二階から二階へ移りまだ嫁かず 新婚のひそ~~~と二階で居 許されるまでの二人の二階がり お二階を二号に貸して気が疲れ 産む迄は二階でよいと言ふ夫婦 一階借り飲んで帰つたらしい音 一階借りお二階さんで通つてゐ 札 婚の 階借 段を上手に上る二階の子 子なら行くがと二階から男 亡人二階を借して強くゐる とも 曜 の立派 0 り段 宿の二階の明るすぎ 朝 り同志の愚痴が水の事 顔馴染なり二階借り の一階を開け放ち な方が二階借り 々 夢を太く持ち 岡橋宣介選 山茶花 風来子 勝 悦 豆 潮 水 きる子 喜久堂 いわを 淡 柳 木 竹 子 秋花客 舟 鮭 声 班 司 林

養

階から抜け毛を落す春日 街 は 0 隈 一階を仰ぐパトロー なし二階のハーモニカ 悦 豆 香子秋

色

月

聞込みが無口のまんま帰るなり 二本目を燗けさせ聞込み成功 聞込へ時雨をついた日の手柄 聞込みが戻り本署は活気ずき しやべりそうな女へ聞込み鉾を向け 開込み 聞込みへ床屋の口のよくすべり 聞込みにこんどは親の方が惚れ 聞込ゅにぞろくくと子がたかり 聞込みに来て押売もせずに去に 聞込みをうまくまいたは情婦なり 聞込みをさげて社長へくいさがり 聞込みにちと永すぎるローマンス 聞込みがチビー一耐を飲んで居る 聞込みの刑事へ子供よくなつき 聞込みらしい人守衛にとがあるれ 聞込みが頼みの綱とはなりにより 聞込みと知らずでしゃはり喋り出し 込 力な聞込みらしい署長等 込みの税吏へ視線寒ら射る 込みで武装警官どつとくる 込みが上手で仲人頼まれる 2 と違 の共同墓地へ来て休み 開込み」 ふ 養子の酒の量 大森風来子選 きさ子 喜久堂 山茶花 清流坊 夢 潮 天 番 しげを ひろし 悦 水 木 古城山 水 春 恒 竹 豆 杜 茶 国 堂 亩 朗 子 荘 国 朗 秋的

開 開 聞

聞込があたり素うどん一つ喰ひ 開 込へぶつきら 棒 な 鲍屑 風来子 紫

岡山支部句会 (岡山市)

二月十五日 於 山陽旅館

座布団のない子が委員のバッチっけ にが笑いして座布団を家主敷き 座布団を敷かず履歴書置いて去に 見合する座布団の位置気をもませ 来客に子供のねんねほどかされ 座 絹 布 そくりの自信はなくを笑人で見せ そくりで買うた着物の値をいわす そくりをしまい忘れて気がつかれ そくりが知れて気まつい日が続き そくりが洗濯板に乾かされ 布 ず そくりを到々出した年の暮 団 団 九 の枕へ転た寝のよだれ で掃いて独身飯にする のある座布団に朝の酒 大森風来子報 満佐志 千代春 久米維 青 素 干 藤 越 紅 方

★大万川柳 発 続 切 ・ 四 四 密 る 梅里の店 東 京そ アベノ橋地下映画食道街 一とす 月廿一日 月十五日 ば C

司

御投句は大万宛・どなたでも (第廿五回)を募る 路郎先生選 (店内に掲示) 句数五句以内

失業

下關支部句会 (下関市)

二月八日 於 下関鉄道職員会館 石 Ш 侃 流

目 目

內小兒科

安間

性病科

女

岡

Ξ

四

郎

年 仲 母 年 3 プロボー 蛇に似た縄に動悸がおさまらず 旧 朝まだきどってりと落ちる年賀状 女 派手かしら等と鏡へひとりごと 蛇 刷 病む母へ湯をつぎそえる洗面器 人の膝が二の膳からくずれ として諭し女として甘え 賀 わがして置いて悠々蛇は逃げ だけの世帯を見せぬ男下駄 4 だろ泣くなと親父叱りつけ 姓を添えて恩師へ出す賀状 使 状もら総選挙らしく K ので宣伝兼ねた年賀状 状思ひ出せない人であり 0 4. 女せめてもの紅をさし 丸くまわりを輪で囲み ズする日少っし酔って来る が廻つてる洗面器 つとむ 妻揚子 土筆坊 半休門 ほなみ 茶目坊 九呂平 伊三男 侃 良 市 坊 人 坊 美

霜やけの手に手袋が小さくなり

十九平 大甲帽

を

焼く手袋片方だけ汚れ

犯人がちよつびり妻子の事にふれ 自白してからじ刑事が茶をするめ 交際の限度に父が部屋へ呼び

東岸子 三林坊

笑気坊

際

を 費 0

初めたらしい靴の艶 の内で二号も囲つてい 頃程思ってはくれず 広さへ未亡人が随ち

ゆたか

際

際

惠二朗 風来子

子は皮手親は軍手で行く見合

雑川 弓削支部会句 (岡山県)

このひよったん余程を習をのんで艶

袋を脱いで財布を確かめる

八ツ茶

風の子

天 袋

が白手袋を派手に撮り をぬいで柄よる特価市

干

声 容

二月十五日 島 二葉旅館 鉄 児 報

ライバルの事が気になる待ち果け 待ち呆け電話をずれは出たと云い 恩 母が折れやつさもつさのいりがっき バラックの恩人へ自家用車をつける 恩 恩 恩 連 連 連 人の 人に 休 休の一日だけは鍬を持ち 休 と胸に小さくたたんであ が へ金のないのも夢を抱き 0) 断り 女で妻にうたぐられ 長逗留へ妻 妻は財布の底を見せ 月 給少し前借し 切れぬ金を貸し の愚痴 弓削平 喜多八 七面山 鉄 鳴 牛 白 児 歩 貫 頭

淀川支部句会 (大阪市)

ハリ柳雑誌社 都会人になったつもりで月賦を着 山一つ越えて来ましたのど自慢 E 一二町の道も乗つてる都会人 お世辞とは知つて聞いてる都会人 ロボンを打つて都会の娘は踊り チケットが何かの斯うのご都会人 ウイロー社句会 武 部 香 林 都詩子 凡九郎 六竜子 菜 林

京都市部句 会 (京都市)

雜川

二月十六日 於 松 中 夢 裡 源 報 寺

E

0

借

も払へぬ幕と腹を決め

於柳云亭 魔花

日立櫻島支部句会

(大阪市

(ハワイ)

驱 水 水 クツションの深さ投資の母印むす 声 新 もくろみを腹に無職のふころ手 投資しろなどと上手な無心なり 人と 仙 仙 高 しい土地へ投資の屋根瓦 の菅風速ニメートル の袴に冷えた手がきかず に話す夫人の投資癖 同じ黒子で誰何され みてい 迷 + 小 紅 芳 鳥 寿 秋 騸 3 朗 4

算盤が合はずにのびる晦日そば

さとみ女

0

暮

無性に金が慾しくなり

当る風も

冷たい暮の慈善鍋 で押し切る高利貸

魔花麗

走風肩

年末の相そのまゝテレビジョン日系の孝の一つに餅を搗き

波 峰

宿

クリスマスに逃した客を暮で釣り

古牧春 快夢起

年

を

とる

のに

有金皆はたき

香

もなくただ漫然と年の末

舟

生 即 印 印 へ帯を締めるに手をかられ へ意地が通らぬ涙ふく へ間 へ世帯を捨てた裾を引き 児姉に黒子が一つあり に石置いて来る犬の墓 の黒子が欲しいリルの影 あ 違ひのない念を押 の燈台も霧に消え 草之助 外 いくを 裡 寿 由夫 芽 海

姿見 姿見 姿見 もう一度見る姿見へ手を取られ 目印と知れた日記の日を妬かれ

> 東へ半丁浜側 電話南電三二四六

年の末 年末はおらが天下とボ 斯くなればかくなり乍ら年の末 特価セルラジオの声はせきたてる 一年 なる様になれと決めてる大晦日 年末が来ようと来まいと独り者 軸 末は燻りながら春となり 末をよそに飼猫日向ぼこ 末 をかえて春待つ室となり 0 0 要の度胸に引きづられ 街 倹約嬉し歳の暮 幅 狭くなつて見え インター 大 峰 斧 亭 迷 雪有平朗駒朗雨 風

二月六日 丸 於 尾 日立造 潮 花 船 報

玄関の紅緒は逢ひに来たらしく 母の老ひ娘の口紅もそねみたく キッスした口紅のあき拭いてくれ 紅 を塗つて出社の顔になり ひさみ

ワイシャツの紅を妻から叱られる 京 要若くまだたしなみの紅をつけ 紅 任 給もらふ口紅つつましく 0 色 で男娼夜を稼ぎ 花代子 定

客

妻

心

得

たすき仕

度

凡九郎 ゆずる 茶

遺

の味もしみじみ苦労人

六電子

木

万

すき焼の加減は下戸にまかしこき

行くといくつく茶 漬二三杯

牛いらくと花嫁の切るまぐさ 主 男の子ばかり来てゐるひな祭り 白 花嫁のマーチョが村の灯をはずれ 馬 姿見へ今日花嫁さんとしての艶 花 花 F 散 穴 好感のもてる主任の地位に居り 悪 看護婦を

あつめ婦長のひな祭り 祭り婦長もとまり飾りつけ でゆ 嫁 艨 役の あけた主任勝手な判をつき パートの 拓 髪をするに主任の判が要り 任とは貧乏少尉に似た暮し 友になれる主任で親しまれ 卷 酒 0 0 姉 裾が気になる借衣裳 綺 花嫁いたくしく帰り く花嫁おらが国自慢 知らせたくない父の癖 資へ主任は逃げをうち 車で届くひな人形 麗 6 酔らてる雛祭り に座るひなの客 花鶴美 美佐子 万亀子 千代美 秋 幸 率 E 花 龜 巨 望 有 潮 泉 花 昭 蝶 船 峯 美

> 賴 投

ま

れた畳元気なとこを見せ

黙 賢

平

人前

前

前

投資したその夜希望を語り合い べったニコーへと団体賞を受け

資にも前途を期待型があり

先 月

生の

拍手へべつた走つて来

L

しげお

貴生川支部句会 (滋賀県)

黄 貴生川町役場 瀬 美 秋 報

説明

贵 局 不局

正 IE 大船 老 下手くそが読み番をするカルタ会 正直を悔ゆるばかりで腕もなく 勘定をまかされる身の酔 越年資金ウインド越しの胸勘定 ボ 直 眼 直 な日 ナ 鏡読み手に廻るカルタ会 な男がちびた下駄を履き にのつた心地で スを勘定に入れ忘年会 記で知つた母の恋 母の膝 しい切れず 四苦峯 文 幸太郎 木 斗 紅 輝 文 福 月 志

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

二月十三日 野 於。桑山とよ居 村 味 平 報

夫婦だけになり落ちついた茶漬

帆加夫

世

な

朝

K

茶柱立つ茶漬

をしてお茶漬の箸を置き

二月十六日

阪急梅田検収庫 川紫

香

報

池田支部句会

(大阪府)

茶漬かきこんで新婚また出かけ お茶漬の美味さ我家の陽を拝み

犬 不景気と云ふに宣伝丈けは派手 あれだけの宣伝をして此のお客 宣伝車笑顔見せたりおどけたり 万 が 才 居 0 声 る門は万才そつと舞い K 5 るさき寝正月 智 芳 和 吉 子 子

雜川 浜寺病院支部句会 所 新 (大阪府)

息の根を殺して司会のヒント聞き

十九一

ひすぎたヒントに司会チャ

都詩子

ねぎだけになってする焼ほっこかれ すき焼と市場で決めたからつ風

こんなとこまで来ているた月明り

古 圭

前

明り大きくなった子等の影

十四郎

子に風船貰つて義理のナフタリ 人前が何んですのとヒステリー 人前を意 薬局のサービス医者の真似もやり 剤をたのめば売薬するめられ りした薬局で櫛を買ひ 薬 .6 0 6 6 は K へ出て恥しい過去を持ち 叱ら 生きんが為のモク拾 薬の 要らしくな 顔 漸 会へば 識してゐる が利いてる長病ひ い楽は < 出 ぬ母の愛を知り け 同 ちな計りよう 情しつゝ売り 隣も似た病気 せる芸になり 高うつき 銀 雲碧水 多良子 破魔坊 漫多朗 青道心 黒ン坊 文 新 糖 石 + 鈴

秤 みをつくし川柳会 (大阪市

一月十七日

於 天王寺中学校

天

宿

此の頃は鬼ばかり居る金づまり たのしみは土曜の午後をランデブー 一々の無心であひびきあきらめる 産 0 をまき心の つけ時には心鬼にする つゝかい棒として嫁ぎ 鬼を追ひ払ひ 田古 方 世津子 凡 のぼる 花 E 九郎

雜川 111 柳 友 之 会 (大阪市)

子供でもヒント与えてくれる云い 友 の誘うヒントは聞いただけ 月二十日 於 帝国化工大阪工場 野牛 歩 島 霓 報 坐 浦

> 中退のままでベン屋が性に合ひ 神棚も おゆる し給へ肉の煙神棚も おゆる し給へ肉の煙神棚も おゆる し給へ肉の煙 立札 青二才酒の肴にあつかわれ 青二才一人前に 子にセント与えて土産当てさせる 立れも書き替へ春の山となり 世渡りはアヴァンに勝る青二才 青二才靴下の色まで気どつてゐ 青二字顔を立てると力んでみ 満員をまた見送れば間に合わず どうしても降ろしてくれぬ満員車 をあざける様に死は招き 羅ドアにはさんで満員車 月例会 南海電鉄川 恋を 柳会 友 淵 知り (大阪市) 貴 山 雅楽太 登志晴 葉乙女 不二子 志州山王郎声信林



柳の

私の名前を連呼

との出来ない柳友である。 つては戦争と結びついて忘れるこ さんが亡くなられたのは、私がボ いことは知らない。しかし私にと ルネオで戦つていた頃で、くわし 部の初代幹事である。その市太楼 なら誰でも知つている川雑下関支 柳信を取交しても、お互の顔を 多田市太楼さんといえば古い人 大森風來

> 下る思いであつた。その上、下関柳 籠をいたざいた。 友一同からなる心のこもつた果物 を集めての歓迎振りには全く頭が 陸を知つた彼が、下関の柳人十名 れた人である。一時間前に私の上 時、白衣の長い列に飛び込んで来 帰還をする私が下関港に上陸する て、私の名前を連呼して探してく た翌年、北支から傷ついて白衣の

温顔が瞼に浮んで来るのである。 折にふれ、今は亡き市太楼さんの は私には悪夢であるけれど、その -あれから十五年、兵隊生活

忠美君ではないか

大阪のTと云ら人から川柳雑誌社 る。ある日私の勤める新聞社へ、 柳がとりもつ不思議な縁であ 永忠 美

> り上つた。次から次へと中学一、 れが廻つて来た。回答を出したの 書いてある。私は懐かしさにおど 年前別れた忠美君ではないか、と あつた。先方から、もしや二十八 前を入れて置いた。果して返信が とわ思つたが、回答の隅へ私の名 輩のTと同名だつたので、まさか かれた直後のことなので、私にそ の照会が来た。満年氏が東京へ行 二年の腕白時代が思い出されてく 舎で、同じ部屋で寝起した二年先 だが、丁氏が美作の丁中学の寄宿

柳がとんだ処で旧友を堀出して呉 と云うには遠いかも知れぬが、川 郷はなつかしいらしい。まだ柳友 近作を送つて来たり、川雑岡山の 会員に入会申込も来た。矢張り故 お互の文通が開始され、Tから

Tとは橋本忠師君である。

の帰郷の際に、再び川柳縁に生き の子供を抱え多難な生活を続けて いられたそうだが、山崎帆加夫氏 川県)は引揚後、病を得、六人 田麦太楼氏(岡山市)は「黄鳥 を執筆された▼松本文太氏(石 第六卷第三号へ「六十の手習」 京都番傘川柳会趣味の会へ▼津 年記念事業の一つとして趣味 番町一五高津バンション、火、 落款頒布をされる由、一個六百 →平賀紅寿氏は京番創立廿五周 三〇城東病院に居住せられる由 土、日、月は大阪市南区高津七 に寄稿された▼食満南北氏は む」を二月十六日の「函館新聞 ことになった▼北村白眼子氏 の会で、「柳友」を刊行される 西念寺に於て開催されたマ松井 後一時から東京都四谷区若葉町 朗翁追善句会が二月二十二日午 (函館)は「神尾三休先生を悼 詳細は京都市三条河原町 木は大阪市城東区放出町二 (東京都)は全国療養者

催▼中日川柳句会(名古屋)は|| 四月十二日(日)赤坂中学校で開 制施行記念川柳大会(岡山県)が 神苑文書館で開かれた▼赤坂町町 宮主催の下に三月十五日十時から で開催▼梅の川柳会が太宰府天満 は三月廿九日午後十時から円明寺 吟社主催の下に四月五日午後十時 から栃木市太平山上で開催される 会が栃木市観光協会・川柳不二見 館で開催▼太平山観光全国川柳大 が三月九日午後五時半から健保会 院で開催▼青蛙礀生句会(伊丹市) 部川柳大会が三月十日広島鉄道病 柳飁会一周年記念句会(岡山県) られることとなった。

正

の句と暗合に付取消する三月号中 四月号二十四頁各地柳壇の漫歩氏 男氏「飲んだとは」の句は廿七年 ▼二月号十五頁近作柳樽欄橋本尝

化部杏林川柳会は十七日午後七時 浜の親和寮で開催▼南区医師会文

十五日に二葉亭で開催▼広鉄倶楽 雑弓削支部句会(岡山県)は二月 知事杯は宗高八ツ茶氏が把持▼川 は二月十五日に山陽旅館で開催、 こととなった▼川雑岡山支部句会 路郎主幹が講師として招聘される が開設され川柳講座は本社の麻生 労働会館で四月一日から文化教室 以上何れる路郎主幹出席▼堺市の 日午後二時から三階図書室で開催

る盛会であつた▼南海電鉄川柳会 催されこの種の催しとして稀に見 ベノ百貨店七階のギャラリーで開 が三月三日から十五日まで近鉄ア

三月例会は十六日午後六時から粉

先生の川柳生活五十年記年短冊展

から下寺町の光明寺で開催▼路郎 ▼本社三月句会は七日午後五時半 566666

666666

六時から近鉄直営地下食堂で開催 部句会と合同して三月廿六日午後 周年記念祝賀句会は川雑阿倍野支 から珊枝郎居で開催▼大万川柳二

▼大阪逓信病院川柳会は三月廿八

知らない彼と私。支那事変の起つ

新聞社南分室で開催▼高島玉兎 月十五日午後一時から中部日本 目の十五六は五十六の誤り き訂正する▼三月号六頁中段四行 煮へ」の句は西山節子氏の句につ 三月号十七頁中段十八行目「お雑 段十三行目の落胆は落胆と訂正▼

▼本社句会部集会日程 の 板

但し第一水曜には翌月の句会の 六時に本社に集会する 毎月第一水曜、第三水曜の午後 会案内発送準備 企画其他を協議、第二水曜は旬 川雜句会部

丸尾 潮 花

投句先ー岡山県赤磐郡 兼題「町」麻生路郎先生選 赤坂町 「決心」 祝賀川柳大会 (各題三句以内) 「未練」 「先輩」 一頭」 赤坂中学校 橋本晴の介選 浜田久米維選 丸山弓削平選 大森風来子選 (日)十時

政田大介宛

字結の古句」を草して氏の古句研

い。船の中で句会を開くのも面白 に多くの柳人の参加がのでまし 里を連れて行くつもりだ。この催

士野鞍馬氏は地味ではあるが「二

て柳界へ一石を投じられた。★富

ら観た医者の内幕」と「哀妻物語」 る。一層の御愛読と御べんたつを ある。勿論誌代は据え置きであ られしい悲鳴を挙げたこんなこと 句評「硝子戸の中」を煩わした。 清水白柳子、市場没食子の三氏に を多とする。★本号では武部香林 が尤も好評を博した。執筆者の労 お願いする。★前号では「川柳か で本誌のサービス振り思うべしで の十ページからの内容増となるの う。★本号からは更に四ページ増 深めていただいたことを有難く思 る。ひたすら内容の充実に邁進し は終戦後はじめての出来事であ のうちに売切れてしまい発送部が では、もら吟行プロも編成されて 身近かに感じる。若い柳人達の間 陣居氏は「艶態川柳提唱」によつ を執筆された。★川柳評論家品川 ★研究慾の旺盛な戸田古方氏は 頁した。本誌の四ページは菊版誌 て来た本誌の努力に対して認識を いることであろう。★前号は初旬 ★「夕桜とんぼがへりがして見た 川柳と俳句の区別に対する私見」 し」の句を思い出すほどに春を ٠ …」と云つて尻込みするので、梨 招待されているが、葭乃は「船は 催の「週末定期レクリエーション る。★五月四日には毎日新聞社主 達には岡山で会いたいと思つてい 大会には岡山県下の柳人達はなる 即日帰阪の予定である。赤坂町の は岡山市へ出て支部の人達に会い 会へ出席、こムで一泊、翌十三日 翌十二日は赤坂町誕生祝賀川柳大 Aの人達に講演、こゝで一泊夜は ことになった。ころの中学でPT 私は岡山県の柵原鉱山へ出かける がまたはじまる。四月の十一日に らも少し時候がよくなると私の旅 じた。★忙しいくと云いなが 意味でないことをしみんくと感 なよろこびだつた。長生きが無 顔を見せていただいたことも大き 有難かつた。私も二週間にわたつ くして世話をして下さつたことも べく出て欲しいが、出られない人 二十年振り、三十年振りの人達に 毎日、会場へ詰めかけ終日立ちつ て、一日も欠かさず顔を出した。 ボート」の別府行に老妻同伴で 柳会を催すことになつている。

た。一流の画家、詩人、歌人、俳 ★短冊展は素晴らしい成績だつ 本号も又好読物の満載である。 究の深さを示された。等々々で しかつたが、不朽洞会員の多数が 贅田品をして下さつ たことも嬉 人、柳人の方々が、よろこんで協 記念放送をした。

カン 朽

崎温泉に遊ばれた

大森風来子氏 八日、煙草組合西支部懇親会で城 出席、路郎師と生々庵居に一泊さ 冊展を観て、その夜の本社句会に ブル、ジャブになり、作句時間の絵 日本語部に関係されてから所謂が 山県)は二月十八日芽出度華燭 (平塚市)の母堂が二月廿日に永眠 造船川柳句会に出張指導をされる 山へ、四月十五日には玉野市三井 れた。なお三月廿八日には棡原鉱 三月七日来阪、アベノ百貨店の短 のこと

大森風来子氏(岡山市)は 出に相当なやまされていられると 初旬からラデオ放送局(K口LA) 院舟氏(ホノルム市)は昨年四月 町吉形郎様方へ移られた。▲市岡 の典を挙げられ婚嫁先和気郡日生 談会を開かれた。▲木村孤浪氏 赤坂町制施行記念川柳大会準備相 の風来子、十九平、忠美の諸氏と 下のすべや旅館で、川雑岡山支部 山県)は二月十五日、岡山市内山 後

分私は下Kから川柳生活五十年の 十時半に大阪へ戻ることになつて 午後四時半に別府を発ち六日の朝 いと思う。五日の朝八時に着いて いる。★三月廿九日午前九時十五 散会 氏が出席した▲蛭子省二氏

長男文也君を 儲けられたお 二月十一日に 氏(大阪市)は ▲石井白面人

欣び申上げる。▲政田大介氏(岡 事の都合で三月末限り退会された

の歓迎小宴が三月七日本社 かれ、路郎、生々庵、香林、文蝶 後、河原町の紅ぼたんで開 句

看護婦

(十句)

大森風來子選

里帰り

(十句)

尼

綠之助選

課題吟募集

社 級

長

(十句) (十句)

川村好郎選

(五月二十日韓切)

尾 (四月二十日締例)

栞選

港の予定だそうである。無事航海 国のトコピラ港からエヤーメール 見せられた桜川不水氏へ下関市 豆秋、春巣、葉、古方、三司の諸 をお祈りする▲直原湖月さんは家 水氏は四月中旬頃神戸あたりへ帰 の留守宅の菊枝夫人から、チリー は昨今病狀軽快、短冊展へも顔を とのこと▲野本吞水氏(吹田市) 従業員組合の書記長に選出された と云う心細いおたよりに接した。 県)は近頃は病床の仰臥生活を続 で投句して来たと届けられた。不 れているが、今回更に山陽新聞社 忙の中に、「川雑岡山」の世話をさ ▲延永忠美氏(岡山市)は本務多 でも杖にすがつて外出が出来れば けていられるが四月に入つて半町

文章(評論・研究・感想其他)

(毎月廿日韓初)

柳塔(雜

詠)麻生路郎選

近作柳樽(雜詠廿句)麻生路郎選

每號募集

新 会員 紹

児 尾 岩 飯 丸 藤 梅 3 平 志 上 歩 桂 郎 (大阪市) (大阪市) (大阪市) (大阪市) (大阪市) (神戸市) 鮎美氏 文蝶氏 推薦 推應 IE. TE.

▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟 ▲『課題吟』は何人でも投句が出 ▲投句は各種必ず別紙に認め、 を募る 所氏名雅号を明記する事。 稿 住

▲『川柳塔』への投句は不朽洞会 来る。

in Japan 大阪市住吉局區內形代西五丁目二五卷地 昭和廿八年四月 一日発行 昭和廿八年 三 月廿五日印刷 B列5号 川柳雜誌 半ヶ年 一ヶ年 毎月一 定価 送(料四円) 二六四円 回 五二八円 第第四八 一日発行 四〇四

発行所 柳雜誌社 指号日地大阪七五〇

大阪市住吉局區內男代四五丁目二五卷垣

行耳刷人

麻

生幸二郎

里 氏

推馬

THE SENRYU ZASSHI

NO . 3 1 1

Published monthly by Senryn Zasshisha, Osaka, Japan.







